

人外魔境

有尾人

小栗虫太郎

青空文庫

大魔境「ムラムブウエジ悪魔の尿溜」

フランスの自動車会社シトロエンの探検隊――。これは、米国地理学協会ほどの大規模なものではないが、とにかく一営利会社としてはなかなかの仕事をしている。最初は、アフリカのサハラ沙漠をトラクター牽引車で突破し、続いて、ペルシア、中央アジアを経てペキンまで、キャタピラー無限軌道をうごかしていった大旅行隊をさえだしている。

さて、その三回目の計画であるが、すでに選定もすみ雨期あけを待つばかりだそうである。それも、これまでのような自動車旅行ではなく、謎とおくそく臆測と暗黒のうちにうずもれている、前人未踏の神秘境を指しているのだ。

では、どこか？ そんな土地がまだこの地球上にあるのかと、読者諸君は不審がるだろうが、あるとも大有りである。

「テラ・インコグニタ未踏地帯」と、精密な地図にさえ白圈のままに残された個所が、まだ四、五か所はある。それらの土地は、なにか踏みいれば驚天動地的なものがあるだろうと、聴くだに探奇心をそそりたてる神秘境なのである。

そこでもず、選定会議にのぼった候補地をあげることにしよう。そうして、シトロエンの探検隊がこれからゆこうという場所が、いかにそれらさえも凌ぐ^{しの}超絶的な地位にあるかということをも、読者諸君にはつきりと知つて貰おう^{もら}。

一、南米アマゾン河奥地の、^{リオ・フォルス・デ・デイオス} Rio Folls de Dios の一帯。

二、北極にちかい、グリーンランドの中央部八千尺の氷河地帯にあるといわれる、^{イミク・スワ} Imik-Suah 《セルミク・シユアー》^{ヨミジ} の冥路の国。

三、^{シナ} 支那青海省の ^{プシパマダー} Puspamada 《プシパマダー》^{シナ} の、いわゆる金沙河ヒマラヤの巴顏喀喇^{バイアンカラ} 山脈中の理想郷。

四、？

第一のアマゾン河奥地というのは「神々の狂人」と訳される。ここへは、米国コロンビア大学の薬学部長ラマビー博士一行が探検したが、ついに瘴癘^{しょうれい} 濕熱^{いしつねつ}の腐朽霧氣^{ガス}地帯から撃退されている。ただ、白骨をのせた巨蓮^{グイクトリア・レギア} の食肉種が、河面^{かわも}を覆っているのが望遠レンズに映つたそうである。

第二の神秘境は、エスキモー土人が狂気のように櫓^{そり}を駆つてゆくという、グリーンランドの中央部にある邪霊^{シユアー}の棲所^{すみか}である。そこは、極光^{オーロラ}にかがやく八千尺の氷河の峰々。

そこには、ピアリーやノルデンスキョルド男でさえもさすがゆきかねたというほどの——
氷の奥からふしぎな力を感じる場所だ。

第三は、梵語^{ぼんご}で花酔境と訳される。そこは、遠くからみれば大乳海を呈し、はいれば、
たちこめる花香のなかで生きながら涅槃^{ねはん}に入るという、ラマ僧があこがれる理想郷^{ユートピア}であ
る。彼らは、そこを「蓮中の宝芯^{マニ・パールドメ}」と呼んで登攀^{とうはん}をあせるけれど、まだ誰一人として行
き着いたものはない。そのうえ、古くは山海経^{せんがいききょう}でいう一臂人^{いっぴじん}の棲所^{すみか}。新しくは、映
画の「失われた地平線」の素材の出所とにらむことのできる——まさに西北辺^{へんきよう}・疆支那^{きょうしな}
の大秘境といえるのである。

しかし、以上の三未踏地でさえ足もとにも及ばぬという場所がいったい何処^{どこ}にあつてな
にが隠れているのか、さぞ読者諸君はうずうずとなってくるにちがいない。それは赤道中
央アフリカのコンゴ北東部にある。すなわち、コンゴ・バンツウ語でいう『M'lambwezi
《ムラムブウエジ》』訳して「悪魔の尿溜^{にようだめ}」といわれる地帯だ。そこには、まだ人類
が一人として見たことのない、巨獣の終焉地^{しゆうえんち}「知られざる森^{セブルク・ルクジ}の墓場^{ムラカバ}」が、あると
伝えられている。

ではここで、この謎の地域がけつして私のような、伝奇作者のでたらめでないという証

拠に、英航空専門誌『Flight』《フライト》に載った講演記事を抜粋してみよう。講演者は、ナイロビ、ムワンザ間のウイルスンエアウエーズ航空会社のファーギysonという操縦士だ。

私も、悪魔の尿溜攻撃は、数回にわたって試みましたが、結局空からも征服は不可能という惨めな結論を得たばかりです。

飛行機万能の現代では、航空機の前に未踏地はなし——とまでいわれるのに、なぜ悪魔ムラの尿溜ムフエジだけには敗退したか？ 悪気流か？ それも一因でしょう。

だいたい、悪魔の尿溜の北側は大絶壁になっております。そのうえがゼルズラと呼ばれる流沙地帯なのですが、そこは、上空の空気が非常に稀薄きはくで、よく沙漠地方におこる熱ヒート・ヴァキウム・真空がでるのです。

そこへ来ると飛行機はもうよろよろと蹠蹠よろめぎます。しかし、絶壁下にひろがる悪魔の尿溜の湿林は濃稠のうちような蒸気に覆われてまったく見通しが利きません。その霏もやか、沼気しょうきか、しらぬ灰色の海に、ときどき異様な斑点があらわれるのです。

私は思い切って、最後の飛行の時ぐつと下降してみました。ところが、いままで、濃霧ガスか沼気かと思っていたのが驚いたことに雲のように群れている微細な昆虫だったのです。

横三十マイルにもひろがる悪魔の尿溜ムラムブウエジの上空をぎつしりと埋めて、おそろしい蚊蚋かぶゆの大群が群れているのです。マラリア、デング熱の病原蚊、睡眠病の蠅、毒蚋、ナイフのような吻くちの大馬蠅の Tufwao 《チュファ》 ああ、その大集雲！

悪魔の尿溜に、よしんば金鉱が隠されてであろうとダイヤモンドが転がっていようと、あるいは珍奇獣虫がいようと原人がいようと、この永劫えいごう霽はれようとも思われない毒の羽虫の雲を除くには、恐らくガスマスクをつけ防虫完備の工兵が、優に一師団をもつてしても数年はかかるかと思われます。

これが飛行家の観察した悪魔の尿溜だが、つぎに、その奥にあるといわれる巨獣の墓場のことである。おそらく読者諸君も、ゴリラや黒猩チンパンジーなどの類人猿や、野象にかぎって死体をみせぬのをご承知であろう。してみると、どこか到底人間には行けぬ密林の奥にでも、彼らの死場所がなければならない。悪魔の尿溜ムラムブウエジがこの条件にぴったりと嵌はまっているわけだが、これも作者の創作と思われるでは困るから、歴然としたパラッフィン・ヤング卿の赤道アフリカ紀行、「コンゴからナイルカプト・ニリ河水源へ」のなかの一記事を引用しよう。

晴天だと、ルウエンゾリ山が好箇の目標になるのだが……、降りだして雨霧に覆われてからは、ただ足にまかせて密林のなかを彷徨いはじめた。泥濘は、荊棘、蔦葛とともに、次第に深くなり、絶えず踊るような足取りで蟻を避けながら、腰までももぐる野象の足跡に落ちこむ。

すると、前方約百ヤードほどのあたりに、ぴしぴし枝を折りながらドス赭いものが動いてゆく。ゴリラだ！ 私はこのコンゴの奥ふかくにくるまで、ゴリラには一度も逢わなかったのだ。そこで、ほとんど衝動的に連発銃をとりあげようとした。すると、土人が一人飛びついて銃をおさえ、

「旦那、あのゴリラ《ソコ》は恩人です。殺すなんて、英人の旦那らしくもねえですがぞ」

土人は、ゴリラのことを「Solo 《ソコ》」という愛称で呼んでいる。私は声を荒らげるよりも呆氣にとられて、

「なぜいかなのだ。ゴリラが獲れるなんて千載に一遇ではないか」

「それがです。旦那は、野象の穴へ落ちたとき、磁針をお壊しなすったので、儂らは、どつちへどう出たらこの森を抜けられるか、いま途方に暮れているです。そこへ、あのゴ

リラ《ソコ》が教えてくれたでがすよ。つまり、おらが歩んでゆく先が北に当るぞちゅうて……」

「そんなことが、お前にどうして分るね？」

「あのゴリラ《ソコ》は、いま森の墓場へ死にゆこうとしているのだ。それが、わしらにはゆけねえ悪魔の尿溜ムラムブウエジにあるちゅうだ。ゴリラ《ソコ》はな、雨が降るとあんなには歩きましねえ。ぼんやりと、手を頭にのせてじつと蹲しゃがんでおりますだ。わしらは、幼ちっけなときからゴリラ《ソコ》をみてるだが、雨んなかを、死神にひかれて歩かせられてゆくような、ゴリラ《ソコ》にかぎって北へゆかねえものはねえでがす」

私にはその悪魔の尿溜ムラムブウエジの一言がぴいと頭へきた。事によつたら、いまいる我々の位置が途方もなく深いのではないか。そういえば、密林のはずれにあるマヌイエマの部落で、《Kungo 《クンゴ》》といっている蚊蚋かぶゆの大群が、まさに霧クンゴのごとく濛々もうもうと立ちこめている。私は、そう分るとぞつと寒気だち、あのゴリラがいなければ死んだかもしれぬと思うと、いま頭に手を置いてのそりのそりと歩いてゆく、墓場への旅人に冥福めいふくの十字をきつたのである。

ヤング卿はこうして倉皇と逃げかえつて、危く一命を完了した。なまじ進めば、北は瞬時に人を呑む^の危険な流沙地域。他の三方は、王蛇^{ボア}でさえくぐれぬような氣根^{きこん}寄生木^{やどりぎ}の密生、いわゆる「類人猿棲息地帯」の大密林。だが、読者諸君、そこへ踏みいて無残にも死に、奇蹟^{きせき}的^{てき}にも大記録を残すことのできたわが日本人の医師がいるのだ。その踏破録を、シトロエン文化部の発表に先だつて、これから物語風に書き綴^{つづ}ろうとするのである。

有尾人ドドの出現

^{ポルトガル}葡領東アフリカの首都モザンビークは、いま雨期のまっ盛りにある。

人が腐る、黒^{くろんぼ}人の膚からは白髪のような菌がでる——そういう、雨期特有のおそろしい湿熱が、いまモザンビークをむんむんと覆いつつんでいる。雨、きょうもこの島町は湯滝のような雨だ。

毒蠅のマブングを避けて閉めきつてゐる室のなか、座間の研究所の一室に、アツコルテイ先生がいる。イタリア・メドナ大学の有名な動物学の、この先生はなにものを待っているのだろう。焦^じれきつて顎髭^{あごひげ}からはポタリポタリと汗をたらし、この醞^{うん}氣^きに犬のよう

に喘^{あえ}いでいる。

「座間君、カークが僕になにを見せようというのだね。僕が、アツと魂^{たまげ}消るようなものというから船を下りたんだが……」

「秘中の秘です。なんとでも、先生のご想像にお任せしましょう」

「じゃ、オカピか、ゴリラかね」

「はっはっはっは、そんな月並みなものなら、お引き止めはしませんよ」

座間はただ、さも思わせぶつたようににたりたりと微笑^{ほほえ}んでいる。彼は、三十をでたばかりの青年学徒、小柄で、巨^{おお}きな顔で、やさしそうな目をしている。しかし、一目肌をみればそれと分るように、座間は純粹の日本人ではない。三分混^{テルティオ}血児——アデンの雜貨商だった日本人の父、黒白混血のイタリヤ人を母とした三つの血が、医専を日本で終えても故国にはとどまらず、はるばる熱地性精神病研究にモザンビイクへきたのであった。

というわいるわ、女には舞踏病の静止^{ラマーナヤーナ}不能症、男には、マダガスカル特有の『Sarimbav

』『サリムバヴィ』や『Koro』『コロ』、『そうへ、モザンビイク一の富豪アマーロ・メン

ドーサの援助があり、ついに研究所をひらき土着の決心をした。そうして、座間は黒人の神となった。生涯を、熱地の狂人にささげ、藪^{やぶくさ}草にうずもれようとも、あわれな憑^{ひょうい}依

妄想もうそうから黒人を救いだそうとする——座間ヒューマニズムは人道主義の戦士だった。そうして、六年あまりもモザンビークで暮すうちに、彼はカークという密猟者と親しくなった。次いで、よくカークをつれて奥地へゆく、アツコルティ先生とも知りあいになったわけである。しかしいま、ちよつと南阿アフリカから寄港した先生を、なぜ座間が引きとめているのか。たしかに、なにかの驚くべきものをアツコルティ先生に、みせようとしているのは事実であるが、一体なんであろう

折からそこへ、扉がいて若い男が姿を現わした。一見、黒白混血児とわかる浅黒い肌、きりつとひき締った精悍せいかんそうな面つらがまえ、ことに、肢体したいの澀はつちつ刺さきは羚羊かもしかのような感じがする。

ジョジアス・カーク——国籍せきは合衆国アメリカだが有名なコンゴ荒し——禁獣を狩つては各地へ売る、白領コンゴのお尋ねものの一人だ。

カークはお待ち遠さまと微笑んで見せて、右手を扉のそとにだしたまま闕しきいから入ってこない。やがて、彼の手にひかれてこの室内へ、まったく予期以上とばかりアツコルティ先生が目をはる、世にも不思議な生物がはいってきたのだ。まったく、そのときの先生の驚きようといったらなかった。一眼鏡モノクルの、目をあけたままポカンと口をあけ、やつと経たつ

てから正気がついたように、

「おう、有尾人！」と唸るように呟いた。

それは、全身を覆う暗褐色の毛、丈は四フィートあるかなしかで子供のようであり、さらに一尺ほどの尾が薦骨のあたりからでてゐる。といって、骨格からみれば人間というほかはないのだ。しかし、頭の鉢が低く斜めに殺げ、さらに眉のある上眼窩弓がたかい。鼻は扁平で鼻孔は大、それに下顎骨が異常な発達をしている。仔細に見るまでもなく男性なのである。

それはまあいいとして、この有尾人からは、山羊くさいといわれる黒人の臭いの、おそらく数倍かと思われるような堪らない体臭が、むんむん湿熱にむれて発散されてくる。アツコルティ先生は、ハンカチで鼻を覆いながらじっと目を据えた。

「ふむ、温和らしい。ときに、君らには懐いているかね」

「ええ、そりやよく」とカークが煙草の輪を吐きながら答えた。

「すると、これを獲ってから大分になるんだね」

「いいえ、此処へきてまだ七日ばかりですよ。第一ドドが、僕の手に落ちてから二週間とはなりません」

「ドドとは……」

「僕らがつけた、この紳士の名前です」

「はっはっはっは、じゃ、有尾人ドド氏というわけだね」

とアツコルティ先生が笑っているなかにも、なにやら解げせぬような色が瞳のなかにうごいている。野生のもの、しかも智能のたかい猿人的獣類が、わずか十日か二週間でも懐なつくはずがあるだろうか。

「ときに、君はこのドド氏をどこで獲ったのだね」

「場所ですか」とカークは思わせぶったようにすぐには答えず、まず、ドドを捕まえるにいたった一仍いちぶ始終を語りはじめた。

「とにかく、ドドが懐いたというのは、最初の出がよかったからです。僕は先生のお説の、ゴリラ定期鬱狂説を利用して、今度こそ六尺もある成獣を捕えてやろうと思っただけなのです」

アツコルティ先生は、前年度の学会にゴリラ定期鬱狂説を発表して、斯しか界に大センセーションをまき起した。

ゴリラには、憂鬱病メランコリーと恐怖症ホビーが周期的にきて、その時期がいちばん狂暴になりやすい

という。そして苦悶^{くもん}が募^つつて来て堪^たえられなくなると『Hyraceum《ヒラセウム》』を甜^なめにきて緩和するというのだ。ヒラセウムとは、岩^{ハイラックス}狸^スが尿所へする尿の水分が、蒸発した残りのねばねばした粘液で、カークはこのヒラセウムのある樹洞^{ほら}のまえに、陥穽^{わな}を仕掛けようとしたのであった。

「僕は陥穽^{わな}をにらんで四昼夜も頑張っていました。すると、五日目の昼になってとうとうやって来ました。それが、なん歳ぐらいのものの藪の密生で分りませんが、とにかく、ぴしぴし枝を折りながら樹洞^{ほら}のほうへやってくる。やがて、えらい音がしてどっと土煙^{どつと}が上がりました。しめた、生きたゴリラなら十萬ドルもんだと、さっと土人と一緒に勢いよく飛びだすと……どうでしょう、たしかに落ちたはずのゴリラの真正面に向きあってしまったのです。しかし、すぐ相手は四足で逃げ出しましたがね」

「ほほ、陥穽^{わな}に落ちたのがそのゴリラでないとすると……ドドかね」

「そうなんです、しかし、覗^{のぞ}きこんだときはさすが驚きましたよ」

「そうだろう。君みたいな……、コンゴ野獣^{しんせき}の親戚^{しんせき}でも、これには驚くだろう。しかし、最初のうちは抵抗しただろうが」

「それがしないのです。じつに、ひどい梅毒^{フラムベジア}痘^{でう}にかかっていたのです。僕は、なにより

可愛想になつてきて、さつそく皮膚に水銀膏をなすつてやると、大分落ちついてきました。もう以前のように幹へからだを擦つたり、泥を手につけて搔きむしるようなことはしませんでした。ただ、目をほそめて僕の手にある、水銀膏の罐をものほしそうにながめているのです。それで僕はこいつは物になると思つて、その罐を匣に手近かの部落まで、とうとうドドをなにもせずひつ張つてきたのです」

「なるほど、さすがはジャングルの名人芸だね」

思わずアツコルティ先生は感嘆の声を洩らした。

「それから、ドドの苺果痘のほうは座間君の手ですっかり癒りました。ですから、僕と座間君にはむろんのこと、この研究所の出資者メンドーサ氏の令嬢、マヌエラさんにも非常に懐いているんです」

ちようどそこへ、扉がわずかに開いて、うつくしい顔がのぞいた。今も今とて噂したマヌエラ嬢だった。彼女は、真白な洗いたての敷布のようにどこからどこまで清潔な感じのする娘だ。座間とは婚約の仲、また人道愛の仕事の上でもかたく結びついている。

「先生が、どういう風にドドを観察なさるか、伺いにあがりましたわ」

マヌエラの明るい声の調子が、アツコルティ先生の気分を爽やかにしたとみえて、先生

はさつそく観察の発表をはじめた。

はじめに尾をさして、いわゆる薦骨奇形のワイシエ・シユワンツ軟尾体だといった。つぎに、全身を

覆う密毛がしらべられ、その一本立ての三本くらいを、チンパンジー黒猩猩特有の排列と説明する。

さらに、ドドの後頭部が大部薄くなっているのが、「黒猩猩アントロポビテークス・カルヴス的秃頭」そつ

くりながら……耳も、円形のチンパンジー・オーレン黒猩猩耳。つぎに、眉がある部分の上眼窩弓がたかいのも、

黒猩猩特有のものだと先生はいう。そうなつて、次第にドドは人間黒猩猩間の、雑交児と
いうことに証明されそうになつてきた。

すると、先生ががぜん俄然言葉を改め、ドドの頭上に片手を置いていったのである。

「これがね、いわゆるミクロケファレン小頭というやつだ。つまり、頭骨の発達がなく脳量がない。

したがつて、智能の度が低いという原人骨同様だ」

原人という言葉にどつと部屋中が騒がしくなつた。誰よりも、マヌエラがまっ先に質問
をした。

「じゃ、ドドが原人なんでございますね。とうに、数百万年もまえに死滅しているはずの
……」

「とにかく、人間黒猩猩々の雑交児という説に、これはむろん並行していえると思うね。い

や、わしは断言しよう。古来、いかなる蛮人にもこれほど下等な頭骨はない——と」

生きている原人、血肉をもった原始人骨——まさに自然界の一大驚異といわなければならない。

では、ドドはどうして生まれ、どこから来……、また純粹の人間とすればどうして数百万年も、固有のかたちが変わえられずに伝わったのだろうか。

でまず、ドドを人獣の児として考えてみよう。そうすると、なぜ群居をはなれて彷徨^{さまよ}っていたのだろうか。捨てられたか……追放されたか……？ あるいは、ずうっと幼少時から孤独でいたとすれば野獣や、王蛇^{ボア}が横行する密林でぬけぬけ生きられるわけではない。また、故郷のジャングルをしたう郷愁といったものも、ドドには氣^け振^ぶりにさえもみえないのだ。

郷愁を感じない、野生動物がどこにあるだろうか。つかまって、環境がちがったときはどんな生物でも、食物をとらなかつたりして郷愁をあらわすものだが、それがドドには不思議にもないのだった。

すると、カークをふり向いてアツコルティ先生がいった。

「まだ捕獲した場所を聴いてなかったね。いったい、このドドをどこで見つけたんだ？」

「それが、ほぼ東経二十八度北緯四度のあたりです。^{イギリス}英領スーダンと^{ベルギー}白領コンゴの境、
 ……イツーリの^{ゴリラ}類人猿棲息地帯から北東へ百キロ、『^{ムラムブウエジ}悪魔の尿溜』の魔所へは三十マイル程
 度でしょう」

^{ムラムブウエジ}悪魔の尿溜——それを聴くと同時に、一座はしいんとなつてしまった。ただ、屋根をう
 つ大雨の音だけが轟いて^{とどろ}いる。

「そうか、悪魔の尿溜のそばか——」

アツコルティ先生もここまで来ると、あつさり^{あきら}断念めたように投げやりな口調になつた。
 ドドを、悪魔の尿溜と組合せることは、もう科学者の領域ではなかつたからである。

それから先生は、ドドのために^{きゆうきよ}急遽帰国する決意をし、あたふたと時計をみながら
 帰つていった。そのあと、座間とカークが疲れたような目で、ぼんやりと屋並みをながめ
 ている。

砂糖菓子のような^モ回教寺院の屋根も港の^{しょうぐん}檣群も、ゆらゆら雨脚のむこうでいびつな
 鏡のようにゆれている。そのとき、^{フレンチ・マダガスカルサービス}仏マダガスカル航空の郵便機が、^{もや}雨靄をくぐりくぐ
 り低空をとおつてゆく気配。座間は、むつくり体をおこして言った。

「君、あれなんだがね」

「あれって？ 飛行機がどうしたというんだね」

「つまり、ドドのことなんだ。ドドは、飛行機をみてもけっして恐がらないのだけ。かえって、嬉しそうな目付きで、奇声さえあげる。そうかといって、『悪魔の尿溜』^{ムラムブウエジ}の近傍に航空路はないよ。英^イ帝^ン国^ペ航^リ空^{アル}も、フランスの亜^エ弗^{ール}利[・]加^ア航^{フリ}空^カも、それぞれ地図のうえで半度以上も隔っている。奇怪だ。猿人、原人といわれるドドが飛行機に驚かない。それでいて、王蛇^{ボア}や豹をみるとひどく恐がる」

「きつと『悪魔の尿溜』探検の飛行機でもみたんだろうよ。しかし、五度や六度で、馴れるとは思われないな」

太古以前の、原始生活をしていたはずのドドが飛行機に驚かない——これはまさに不思議以上だ。やはりこれはアツコルテイ先生が一度疑ったように、ドドは一種の作りものではないのか。そう思ってながめると、とうてい想像もできないようなおそろしい秘密が、ドドの肉体に隠されているように思われて、しみじみそら恐しくさえなる。

暗くなってきた。すると、雨霽^{もや}のむこうから、ボーツと汽笛がひびいてくる。E・D^{エルダー・デムスター}

・Sの沿岸船ベンガジ丸が、いまモザンビークにはいつてきたのだ。しかしその船は、^{ムラムブウエジ}やがて悪魔の尿溜へ一同を駆^かりやろうとする、運命の使者を乗りこませていたのである。

ミス・ジキル・ハイド
善玉悪玉嬢

ベンガジ丸には、ヤン・ベデーツというベルギー青年が乗りこんでいた。

これは、マヌエラの父の旧友の息子で、マヌエラとは筒井筒つついづつの仲だが、うまがあわぬというのか、マヌエラは非常に彼を嫌っていた。それに、どこへいっても腰の落ちつかぬ男で、先ごろまで、エジプトのミスル航空会社で副操縦士コ・パイロットをしていたが、そこでも、喧嘩をしたらしくモザンビークに帰ってきたのである。マヌエラの父が親代りで、ヤンの父の遺産を保管しているからだった。

ところがヤン・ベデーツがくると、研究所の空気がきゆうに乱れてきた。それはヤンが患者を汚ながつたり虐待ぎやくたいするばかりか、座間やカークには、この混血児めと蔑視的な態度を見せるからだった。

「なにか、ありましたんでしよう？」

今日も今日とて案じ顔に、座間の胸のボタンをいじりながらマヌエラが、やさしい上目使いをして訊ねた。

「さつき、ヤンがたいへんな目をして、ハアハアいいながら水を飲んでいましたよ。それ

からカークさんは、拳固のへんに辛子膏をなすっていらつしやるんですの」

「じゃ、やったんでしよう。カークは、いつかやってやると言っていましたからね。ジャングルの主が野牛を殴りとばすような勢いでやったんじゃ、ヤン君もさぞ痛かったでしょう。しかし、ヤン君の身にもなれば……」

「え？ なんのことですか」

マヌエラは聞き咎めた。

「つまり、三年ぶりでここに帰ってくると、あなたには思いがけない僕という人間ができている。八つ当たりしたくなるのも無理はないでしょうよ」

しかし、マヌエラはかなしそうな目をして、

「あの人がじぶん勝手な僻みでどういう考え方をしようと、それにあたしたちまでひき摺られるわけはありません。ねえ、ヤンはヤン、こっちはこっちですわ」

と、香りのいい髪を嗅がすように、座間の胸のなかへ頬をうずめる。

「あたしは、あなたの日本の血を尊敬してますわ」

まるで素直な子供のような言い方であった。座間には、それが弱い電気のように、快よく響いてくる。すると、マヌエラがふと話題を変え、

「そうそう、この週の報告をしなきゃなりませんわ。でも、ドドは相変らずですの」と、引き受けたドドじゅんいく 馴育の結果を話しだした。

「火がわかったのが三週まえでしたね。手工はどうでしょう？」

「まだ、そんなにお急せきになったって……。でも、先生から言いつけられたことは、ちゃんちゃんとしてますわ。ちかごろは、いったいドドがどんな機嫌でいるか——つまり、ドドの感情表出も見ています」

「はあ、それがわかりますかね」

「ええ、第一ドドは笑われるのを嫌います。それに、色も知っているし記憶力もたしかです。また、相当な学習能力もあります。それで、いつもあたしが使っている水すいせん 仙色の封筒ね、あれを、構内のポストに入れるのを昨日あたりから覚えましたの」

「ほう、そりやお手柄だ、それから、先生がいわれた餌じりよう 料による実験は？」

それによって、ドドが原人か人獣児であるか、その点がはつきりと分るはずだった。

もちろん、これはアツコルティ先生の指図で、難しく言えば「皮膚色素の移行」の研究である。たとえば、果実を主食とする黒人にたいし、その量を減らすと皮膚の色が淡くなる。また淡黒色のホッテントットに常食の乳を減らすと、その色がしだいに濃くなってくる。

る。ことに、その変化がはやいのが類人猿で、つまり、ドドがたべる生果の量を減らして、その効果をいち早くみようというのだった。

マヌエラは、餌料のことを聞くと、かるく口を尖^{とが}らせて、

「いけませんわ。ドドは人間ですわ。科学つてなんて残酷なんでしょう。やれ、ドドに蛋^{たま}白^{んぱく}を与えろ、もし黒^{チンパンジー}猩猩^{ンジー}の血があればきめんに衰弱するとか、食べものを減らして皮膚の色をみるとか……、そんなこと、それは動物にすることだと思えますわ。ドドはあくまで人間で、あたくしの友だちです」

ふかい、同情の念とかたい信念とで、マヌエラがきつぱりと言い切った。彼女の、骨にまで浸みたカトリックの教育は、よくこうした場合、一步も退かせないのだ。座間は浄^{きよ}らかな百合^{ゆり}の花をみるように、しばしマヌエラの顔を恍^{こう}惚^{こつ}とながめていた。

まったく、ドドはマヌエラのそばを一瞬の間もはなれようとしなない。いないと、いまでも聴えるように悲しそうな叫び声をたてる。

お嬢さん、いまに魅入られますよ——と、カークは冗談に言っただけで、まったく二人の親密さにはそう言いたくなる。

ところが、その夜不思議な出来事がおこった。

夜になると、温度はいくぶん下がるけれど、その倦怠^{けんたい}さと発汗の気味わるさ。湿気の暈^{かさ}が電灯の灯をとりまいている。

こういう時には、ドドの唸^{うな}り声さえもちがってくる。じつに、誰でも平常でなくなるよ
うな、蒸し暑い、いやな晩であつた。

その夕、座間はヤンと激論を戦わした。それは、ドドを売れば十万やそこらにはなるだろうから、それにヤンの資産をくわえて研究所を拡張し、名実兼ねた総合病院にしようというのだつた。つまり、座間がしている社会施設を、ヤンが営利化しようというのである。しかし、これには、なによりマヌエラが真向から反対した。それでも、ヤンは嘲笑^{せせらわら}つて、なアにお父さんを説き伏せて晩にきますよと、洒^{しやあしやあ}々と自信ありげに帰つていったのである。そうして、研究所に一つの危機がくることになった。

と、その夜、座間が寝つかれないので、書斎へゆこうとしたとき、ドドの部屋のまえをとおると、鍵がおりてない。そこへ、患者面会人がやすむ部屋のほうで、微かにごそりごそりと音がする。まさか、ドドが逃げるわけはないがと、そつとその部屋の扉をひらいたときだつた。思わず、あつと叫びそうなのを辛^{から}くも抑えたほど、座間のはげしい駭^{おどろ}きにうたれた。

そこにいたのは……ドドではない。さっきの憎しみを忘れたように、ヤンとマヌエラが抱かன்பかりに向き合っている。座間はまず、じぶんの目を疑った。続いて、耳までも疑わねばならぬような会話を聞いた。

「あたしを愛してくれますか」

ちよつと、漁色にすさんだヤンでもふるえた声で言うと、

「ええ、あたしも愛してくれますか」とマヌエラも切なそうに呼吸^{いき}をする。

あのマヌエラ、昼間のマヌエラがなんとという変りかた

丁度このとき、おおきな伸びをしながらカークが降りてきた。すると、ヤンはいきなりマヌエラを突きはなし、手をふりながら向うの扉から消えてしまった。座間は、この世界がまっ暗になったような気持で、ただその場に茫然^{ぼうぜん}と立ち竦^{すく}んでいた。

と、ヤンの姿が消えたと思ったとき、またも座間をあつと言わせるようなことが起った。それは、清浄無垢^{むく}なマヌエラとも思われない……、また淑女^{しゆうわい}たらずとも普通の町家の女でも、よもや口にはしまいと思われるような醜^{しゆう}猥^{わい}な事柄を、まるでじぶん自身に言いきかすかのように、マヌエラがべらべらと喋^{しゃべ}りはじめたからだ。

マヌエラ！ 断じて幽霊ではない、真実のマヌエラだ。昼間の、灼かれようとも挫^{くじ}けな

ヒューマニズム
 い人道主義の天使が、夜は、想像もされない別貌をしてあらわれたのだ。どっちだ？

どっちが本当のマヌエラかと、座間は白痴のように頭を振り振り廊下へでていった。

と出会いがしらに、ドドの手を引いてカークがやってきた。

「君、馴育じゅんいく掛りのお嬢さんへようくいわなきア駄目だぜ。鍵を忘れたもんだから勝手にでちまって、それに、此奴こいつまでがえらく亢奮こうふんしている」

「どこにいたんだ？」

「患者面会入室の廊下の羽目際だ。なにか、こいつが亢奮こうふんするようなことがあったらしい」

なるほど、これまでのドドには決してみられなかった、一種異様な激情のさまを呈している。犬歯を齒齦はぐきまで鉤かぎのようにむきだして、瞳は充血で金色にひかっている。そして、ひくい唸り声を絶れ絶れにたてながら、今にもかくれた野性がむんずと起きそうな、カークでさえハツと手をひくような有様だった。

それからドドをいれて扉に鍵をおろすと、座間はカークを促うながしながら戸外へ出ていった。やがて本土とのあいだが二町ばかりにせまっている、有名なマラガシュの入江に出た。湯のような雨……くらい潮が……ぼうつと燐光にひかる波頭をよせてくる。そして砂上

の、ひいたあとは星月夜のようにうつくしい。だが座間は、どうしてカークとこんなところへ来たのかじぶんでも分らなかった。

「どうしたい、いやに悄しよんぼりして……。まさか、猫の死骸に念仏をいいにきたんじやないだろうが」

カークは、いつもとちがつて底気味悪さを湛たたえている座間を景気づけるように言った。すると、座間はいきなりふり向いて、

「おい、僕にドドを売っちやくれまいか」

「えッ、ドドを売れって」カークも少からず驚いて、

「なんのためだ。僕の手から買つてどうするつもりだ」

思わず見上げる座間の眉宇間びうかんには、サツと一閃の殺伐の気がかすめてゆく。殺してやる！ マヌエラがあゝの魔性のものに魅込まれたのでなければ、あゝも奇怪な二重人格をあらわすわけではない。と、知らず識らず、この入江の腐肉の気にさそわれてきた座間である。

カークは早くも、それを悟つたと見え改まったような調子で、

「じゃ、その話を真剣にとるがね。すると、まず、売る売らないに先だって、決めておきたいことがある。それは、ドドが獣か人間かということだ。売っていい動物か、売っては

ならない人か……サア座間君どっちだろう」

言われて、座間の咽喉のどがぐびつと鳴った。しかし、ちよつと顫ふるえただけでなにも言えなかった。

「人身売買……奴隷売買を……いまこの現代に口にする奴があるかね。それとも、ドドを人獣の児として——その場合を君はどう考える？ 混血だ、おなじことだよ。ドドが黒チンパ猩猩インジャーと人のまざりなら僕は、半ミューラート黒、君は三分混血児だ。僕らが白人以下のものとして蔑視されるのも、君が、半分の獣血をみとめて、ドドを売れというのも……」

そのカークの言葉を身に滲しむように聴きながら、座間はくらしい海の滅入るような潮騒しおさいとともに、ひそかに咽むせびはじめていたのだ。

*

その一夜は寢床のなかで転々としながら、ついにまんじりともしなかった。マヌエラと、ドドの奇怪な行動を考えあぐめばあぐむほど、ますます頭が冴さえて眠れるどころではなかった。

マヌエラのあれは、「ジキル博士とハイド氏」のように二重人格なのか——と、ますます糸のもつれが深まるなかで、座間は追及の鬼のようになっていた。それとも、ドドに同情を深めすぎた結果か？　といつて淑女を流^けすような想像はしなかったが、もしやあるかも知れないドドの魔性が、恋情とともにマヌエラに絡^{から}みついたのではなからうか。

あのとキドドは羽目を隔てていたが、それを透して、なかのマヌエラを遠くから動かす——そんなことは、土人の魔法^{ウィッチ・ドクター}医者なら朝飯まえの仕事だ。まして、飛行機をみても驚かぬようなドドには、なにか底しれぬものがある。

マヌエラ自身の素質か、ドドの魔性かと、廻り燈籠のような疑問が考え疲れたあげくふと消えて、座間は思いがけもしなかった大きな穴が、じぶんの足下に口を開いているのに気がついた。ああ、二重人格でもなければ、ドドの魔性でもない。たんなるマヌエラの裏切りなのだ。ヤンがきてその純白の肌を見、振返つて座間の黒々とした皮膚をみたとき、マヌエラは一途に座間が嫌いになったのだ。売女^{ばいた}、売女め！　とかきむしるような言葉を、寝床のなかで座間は咆^ほえたてていた。やがて夜があけた。雨が暁の微光に油のように光りはじめてきた。

その翌夜、カークを書斎に呼びいれて、座間は氣負つたように話しはじめた。

「君、僕は旅行しようと思う」

「よからう、君はきのうの晩ちよつと変だった、きつと、過勞のせいだと思う。どこへゆくね？ スイスかウィーンかね」

「いや、この大陸のずうつと内核^{なか}へゆきたいんだ。コンゴのイツーリからずうつと北へ――僕は、未踏^{テラ・インコグニタ}地帯にゆく」

「え？」

「ぼくは『惡魔^{ムラムブウエジ}の尿溜』へゆくんだ！」

ナイルの水源閉塞者

カークは啞然^{あぜん}として座間を見詰めていたが、やがて、

「よし、聴こう。しかし、命がけの觀光なんてないからね。むろん、目的もあり見込みもあつてのことだろう」

「そうだ。ときにカーク、君はコンゴへ入り込んで禁獸を狩る。それで、いちばん金になったときはどのくらいなんだ」

「マア、五万ドルかね。オカピを獲ったときは、そのくらいになったが」

「ゴリラは？」

「あれは獲れん。あいつは、遅鈍^{のそ}ついていようだがそりや狡猾^{こうかつ}で、おまけに残忍ときてるんだから始末がわるいよ。いつそ、^{オラン・ウータン}猩猩^{チンパンジー}のような教^{プロフェッサー}授^サ然としたやつか、

黒^{チンパンジー}猩猩^{パン}々^{ジー}みたいな社交家ならいいがね、どうも、厭世主義者とか懷疑主義者というやつは、
猟師にはいちばん扱いにくいんだよ。しかし、射殺しただけでも二、三万にはなるだろう」

「じゃ、そのゴリラが……、無数と、死体をならべている溪谷があつたとしたら……。ざつと、世界の大学を六百とみて、それに、骨格一つずつ売ったにしても、千万長者にはなれる。だが、それは君の仕事だ。僕の目的は別のほうにある」

「冗談いうな」カークはからからと嗤^{わら}いはじめた。

「本気で聴いてりやいい気になって、そんなところが、もしあるなら俺が逃すもんか」

「あるとも」座間は自信気たつぷりにいう。

「僕は、友情にかけ君の勇気を信じていう。ところで、君は、ヘロドトスという歴史家を知っているかね」

「むろん、みたことはないが名だけは知っている。ギリシアに、昔いたという博識^{ものしり}だろ

う」

「そうだ。ところが、そのヘロドトスが書いたなかに、ナイル河の水源についてこういうことがある」

ヘロドトスが、ナイルの水源について次のような話を、エジプトサイスの長官からミネルバで聴いたことがある。

ナイルの水源は、クロフィス及びメンフィスという、シエーネとエレファンティス間に

ある二つの山巔——呼んで 半月の山脈 という溪谷の奥にある。その半月の山脈には

old《コルク》という湖があり、バメティクス王が、綱を数千 “ogyre 《オギエ》” も垂

れたが底に届かずとある。つまり、ナイルの水源は、その奥にあるというのだ。

さらにそこには、「盤根の沼」 「知られざる森の墓場」があり、矮人が棲み

有尾人がいる。そしてそれが、場所というのが悪魔の尿溜で、棲んでいる矮小有尾

人がすなわちドドとなる——座間がこう結論したのである。

「なるほど、しかしその、むずかしいラテン語を説明してもらおうじゃないか」

「それはね、『盤根の沼』というのは、錯綜たる根の沼だ。沼が盤根錯綜たる、

叢林のしたにあるという意味だ。それから『知られざる森の墓場』というのは、巨獣の終

焉ゆうえんち地だ。死体をみせぬ象や類人猿がそこにきて眠るという。ねえカーク、どっちにしても、悪魔ムラムブウエジの尿溜じやないか。しかも、有尾人ドドの故郷だ」

そういえば、カークもそれに似たような土人の伝説を聴いたことがある。ヌグンベという、ドド発見地の近傍の部落だが、そこから悪魔の尿溜の方向にあたる北西かたの山腹に、『Leo《レオ》』という奥しれぬ洞窟があるのだ。——そこが、人類発祥の地だという。

つまり、太古のとき動物とともに、彼らの祖先がその洞から出てきたというのだ。

まったく、そういえば数えきれぬほどあるではないか。こういう、無稽な伝説が探検によつて裏書きされ、また、そういうものがしばしば因となって、探検欲をうごかし大発見をさせたことが！

ここに……、いまその洞窟のかなたには悪魔の尿溜がある。しかもそこが、半獣児ドドの発生地に見されている。

「どうだ君、悪魔ムラムブウエジの尿溜なら何億年も処女でいられるよ。そこでは、動物も、植物も原始地球のままだ。獣交さつりくも、殺戮も自然律にすぎない。そこで僕は、アッコルティ先生の説をもう一步すすめるよ。つまり……ドドは、そこにいる原始人と親和的な、黒狸々との雑交児だろうということだ。第一、親を有尾人とするのには、尾がある。それ以外は、外見、

智能といひそつくりの黒猩猩チンパンジー々だ」

カークは、すっかり圧倒されてしょんぼりと瞬いている。座間の、ちがった人のような不思議な情熱を、どこに、こんな静かな男にこんなものがあつたのだらうと……、相手の唇を呆然とながめていたのである。

「それから」と座間はすべるように続けてゆく。

「なぜドドが郷愁を感じないかということが、僕にはやつと分つたような気がするよ。それはね、フラムベジヤ 苺果痘をわずらつて死期を知つたのだ。そして、死ぬために森の墓場へいった。そうになると、もうじぶんは帰れない……、これから、知らない世界へゆかねばならぬというところが、彼らには本能的にわかる。そこへ、ドドは道をちがえたのだ。そして、森の墓場へはゆけず、君の手に落ちた……。だから君にも抵抗をしない……。こんな人里へきても郷愁を感じない……。ねえカーク、僕はその墓場へ、ムラムブウエジ 悪魔の尿溜へゆきたいんだよ」

原人、類人猿、象もそうだろう？ 彼らが、死期をさとして森の墓場へゆこうとするときは、まったく本能的に帰郷の意志がなくなるという——座間の明快な推測であつた。

しかし、そういう座間が、さび 淋しそうに微笑んでいる。恋の空骸むくろが、死をもとめるかわりに未踏地をえらんだのだらう。やがて、カークとのあいだにかたい盟約が成りたった。

ところが、そのことをマヌエラに話すと、意外にも彼女が一緒にゆこうと言いだしたのだ。犠牲が、ねがう幸福のほうに、マヌエラを向けようとするとき、意外にも、それを蹴って敢然とゆくという。座間はすっかり分らなくなってしまった。

間もなく、マヌエラのをとを蛇のように追う、ヤンを加えドドを連れて、まずさいしょの根拠地となるコンデロガへ発ったのである。

「ちかごろ、七郎はどうしちゃったのよ」

話があると、マスカの実が地上に垂れさがっている陰へ、マヌエラが座間を呼びこんだ。雨期あけの灼^いりつけるような直射のしたは、影はすべてうす紫に、日向^{ひなた}の赭土は絵具のように生々しい。それがコンデロガを発つ探検第一日の前日だった。

マヌエラは、胸に飛びこみたい衝動を抑えているように、ぱちぱちと伏目で瞬いている。「どうもしませんよ。僕は、相変らずの僕ですが」

「いいえ、ちがっています。まへは、そんな冷やかな七郎ではありませんでした。女は、そんな点にはいちばん敏感ですよ。ねえ、なにか、お気に障^{さわ}るようなことがあつて？」
すると、座間がまた迷うのである。それまでは、ヤンとあの夜の狂態はなんだと、彼はマヌエラに瞋^{しん}恚の念を燃やしていた。それが、こうして見ている、初々しさ……たどたど

しさ。なんだかじぶんのほうが思い過しのような、座間にはそんな感じさえしてくる。

あれ以後、ヤンとマヌエラのあいだは非常に外々よそよそしいものだった。少なくとも、ああしたことは一度だけらしく、翌日は、ヤンが根城にしようとした総合病院化を、父にすがって一蹴してしまったのである。これにはヤンも座間と同様おどろいたことだろう。しかし、彼は一夜の甘味をけつして忘れるような男ではない。どんなに白眼視され相手にされなくても、またのチャンスを狙いながら探検隊をはなれなかつたのである。

まったくマヌエラには、座間もヤンもおなじ考えにちがいない。不思議な女だ、二重人格かドドの所業かと……、ヤンが、鉄面皮を發揮して探検隊に加われれば、座間はあれこれと非常に迷いながらも頑固な壁をマヌエラに立てつづけているのだった。

ところで、この探検の費用はマヌエラの父がだし、それも座間が疲労を癒いやす物見遊山としか考えていない。

カークも、大湿林の咆吼ほうこうをよぶ狂風を感じはするが……、死を賭として、不侵地悪魔の尿溜をきわめようなどとは、夢にもさらさら思わないことだった。そしてまた、マヌエラも、おなじように考えていた。ただ、しばらく仕事から離れればと……、ちかごろ座間の様子がじつに変であるだけに、どうかこの旅行で静養してくれと、じつさい悪魔の尿溜の

ことなど最初から頭になかった。しかも、座間とてもおなじように変わってきている。

それは、さいしよカークと二人だけと思ったところへ、意外にもマヌエラが加わるし、ヤンが追ってくる。そうして、絶えずマヌエラの美しさをみていると、この探検は、じつに悪魔の尿溜攻撃にあるのではなく、ヤンを除く、天与のまたとない機会のように思われてきた。密林、鰐わにのいる河、野獣、毒蛇。ここでは、下手人に代ってくれるあらゆるものが豊富だ。

と、その考えが、やはりヤンにもあるらしい。そうして、二人は胸に敵意をひめながら、どうやらさいしよの意図とはちがってしまった探検隊が、数日後はコンデロガを発ったのである。

ところで、悪魔の尿溜攻撃の進路であるが、それは、西方、南方の境界部はコンゴの「類人猿棲息地帯」ゴリラスツォーネ、北は、危険な流沙地域である大絶壁にかこまれ、わずか東のほうに密林帯が横たわっている。ところが、これまでの数回の探検隊とも、そこへはいると同時に消息を絶ってしまうのだ。まったく、木乃伊取りが木乃伊ミイラというあの言葉のように、あとからあとからと続いても一人の生還者もない。しかし一同は、ともかくその道をゆくことにした。

二百の荷担ぎ——それに、車や家畜をふくめた長蛇の列が、イギリス駐屯軍の軍用電線にそうて、蟻塚ありづかがならぶ広漠たる原野を横ぎつてゆく。土の反射と、直射で灼いりつくような熱気には、騾らばの幌車ほろぐるまにいてもマヌエラは眠つてしまふ。やがてゆくと、白蟻が草を噛かみきつたあとがある。兵隊蟻の、襲撃を避けるため不毛の地にしてしまふ。白蟻がかければ沢がちかいのだ。気のせいか、草の丈がだんだんに伸びてゆく。間もなく、第一日の夜営地になる、うつくしい沢地があらわれたのだった。

水際には、蜀葵たてあおいやひるがおのあいだにアカシヤがたっている。水は、一面に瑠璃るり色の百合をうかべ肉色のペリカンが喧ましいやか声で群れている。マヌエラは、こんな樂園が荒野のなかにあるのかと、いそいそと水際を飛びあるきはじめた。そこへ、カークが記憶があるといいだした。

「その沢から、あの藪地ブッシュを越えて、ほぼ十マイルもいったところが、ドドの発見地なんだ。おいドド久しぶりで故郷くにへかえろうぜ」

しかしドドは、マヌエラのうごきを貪るように追っている。まっ白な脛すね、花を摘んで伸びたときのうつくしい均斉。

それを追いもとめる目には通じない意志に、悶もだえるようなかなしそうな色がうかんでい

る。

またドドは、ここへ来てから何ものかの呼び声をうけている。ときどき、段状にかさな
つてゆく中央山脈の、一染の、樹海と思われるあたりをおそろしい目でながめていたり、
なにより、葉摺れの音にもびくつとなるし、あらゆる野性のものが呼び醒まされようとし
ている。それには、座間もカークもとつくから気がついていたのだ。

「ドドは、森の墓場へゆき損つて人の手に落ちた。しかし今に、そのとき失った野性が強
くなるか、それともマヌエラに惹かれて人の世にとどまるか——いずれはどちらかになる
と思うよ。しかし、注意は充分しなきゃならんね」

探検隊がドドを連れてきたには目的があつたのである。それは、さいしょカークと逢つ
たその場所へゆけば、おそらく故郷を思いだして先頭にたつのではないか。そうして隊が、
その跡に続けば人にはわからない、悪魔の尿溜への極秘の道をゆけるのではないかと——と。
しかし、その試みは失敗に終つてしまった。ドドは、はじめて覚えたマヌエラの魅力に、
帰郷の意志などはとつくに失つてしまつてゐる。

その夜、はじめて夜明けまえにライオンの咆吼を聴いた。藪地のなかで、豹にやられ
るらしい小野豚の声もした。やがて、危険な角蛇のいる藪地を越えたとき、は

センズ

ほうこう

ホーンド・ヴァイパー

蛇

や隊のうえにおそろしい不幸が舞い落ちてきた。

それは、抵抗のつよい騾ろばをのぞくほか、いそいで河中に追いこんだ水牛六頭以外は、野牛も駱駝らくだも馬も羊も、みな毒蠅のツエツエに斃たおされたのだ。それから、文字どおりの難行であつた。荷担バガジスぎは、荷が嵩かさんだので値増しを騒さわぎだし、土はあかく焼けて亀裂が這はい、まさに地の果か地獄のような気がする。灌木かんぼくも、その荒野にはところどころにしかない。たまに、喬木きようぼくがあつても枯れていて、わずか数発の弾でぼろりと倒れてしまうのである。

しかし、もうそこは山地にちかい。左には、連嶺をぬいて雪冠をいただいている、コンゴのルウエンゾリがみえる。そのしたの、風化した花崗石グラナイトのまっ赭かな絶壁。そこから、白雲と山陰に刻まれはるばるとひろがっているのが、悪魔の尿溜につづく大樹海なのである。

翌曉、赭あかい泥河でいがのそばで河馬かばの声を聴いた。その、楽器にあるテューバのような音に、マヌエラは里が恋しくなつてしまった。

しかしまだ、ここは暗黒アフリカの戸端口とばくちにすぎない。きのう見た、藪地のおそろしい棘草きよくそう、その密生の間を縫う大毒蜘蛛タランツラ・マグヌス——。しかし今日は、いよいよ草は巨おおきく

樹間はせまり、奥熱地の相が一步ごとに濃くなつてゆくのだ。そして、この三日の行程が四十マイル弱。最後の根拠地となるマコンデ部落にはいったのが、翌日の午過ぎ^{ひる}だった。

ここから、想定距離二十マイルの山陰に、悪魔の尿溜の東端をみるはずなのである。そしていよいよ、これまで経てきた平穏な旅はおわり、百年の道にも匹敵するその二十マイルへ、悪魔の尿溜攻撃がはじまるのだった。

「とんでもねえ。荷担^{バガジス}ぎにゆきア、死にに往^ゆくようなものさア」

酋長がぐいぐい棕櫚^{ボムビ}酒をあおったり印度大麻^{ムトクワネ}を喫ったり、すこぶる上機嫌のなかでもこれだけは聴かなかつた。

「マア、論より証拠というで、ちよつと見てもらいますべえ」

外にでると、連嶺のしたは一面の樹海だ。樹海のはての遠いかなたに、ゆらゆら煙霧のようなものが揺ぎあがっているのがみえる。すると、そばの土人がおそろしそうな声でさげんだ。

「ほうれ、煙が鳴るだよ」

気のせいかな、その煙霧がブウンと鳴っているような気がする。やがて、陽が落ちかかると硫黄^{いおう}色にかがやいて、すでにそのときは塊雲のように濃くなっていた。煙が鳴る——人

煙皆無の大樹海のかたに、毎日、日暮れちかくなるとこの霧が湧くという。そしてそれ以来、この部落を通過して悪魔の尿溜を衝こうとする、探検隊が一人も帰ってこないのだ。しかし、往ゆけるところまでというたとやと承知して、あくる日、荷担バガジスぎとともに密林をわけはじめたのである。

そこは、虎でもくぐれそうもない 蔦つた 葛かずら の密生で、空気は、マラリヤをふくんでどろつと湿しつけている。大蟻、蠍さそり、土亀の襲撃を避け猿群を追いながら……、よくマヌエラがゆけたと思うほどの、難行五時間後にやつと視野がひらけた。

その地峡で、軍用電線が鍵の手にまがっている。すなわちその線を前方に伸ばせないものが、あらたに迫っている密林の向うにあるのだろう。案の定、荷担ヤムグリ・ワンゲぎどもは動かなくなってしまった。ゆけ、金をやるぞとあまり語気がつよいと、おう、お嬢ア——と、なかには泣きだすものが出てくる。

じつさい、ここで一同は戻ろうとしたのだった。探検の熱意は、もう誰にもなく、ただカークの指揮でここまで来ただけでも、一同にとれば大成功といえよう。すると、座間一人がなんと思つたのか、強くゆくことを主張したのである。

殺意が……、この静かな男の面上を覆おほい包んでいるのを、そのとき誰も気が付くものは

なかった。この機会、最後の密林のなかでヤンを殺^やろう。と、身丈ほどもある気根寄生木の障壁、そのしたに溜^かつているどろりとした朽葉の水。それが、燈火へ飛びこむ蛾の運命となるのも知らず、ともかく、荷担ぎを待たして前方に足をすすめたのである。

そのとき、地峡をとおり蛇を追うために、カークが野火をはなつた。その煙りが、娑婆^{しゃば}をうつすいちばん最後のものになったのが、隊のなかの誰と誰だろうか。そうして、最後の密林行がはじまったのである。

すると間もなく、樹間がきらきらと光りはじめてきた。森がつきる——とそのとき、どこに潜^かんでいたのか十四、五人のものが、一同をぐるりと取り囲んでしまった。見なれぬ土人だ。しかも、頭^{かしら}だった一人は短いパンツをつけている。

「やあ、^{ナマ・サンガ}今日は」

カークが進みでて愛想よく挨拶をした。しかし、練達な彼がぐつとつかえ、語尾が消えるように噎^{かす}れてしまったのだ。拳銃が……無意味な銃口をむけている。やがて、顎^{あご}でぐいぐい引かれて森をでると、したは、広漠^{こうぼく}たる盆地になっている。草薺^ぶきが、固まってい

るなかに、倉庫体のものさえある。

「……は、どこだね」

カークが一同を怯えさせまいとするように、言った。すると、その男の口から意外にも、
ウンベカント・クライス 未探地帯——とドイツ語が洩れた。アツと、顔をみると鼻筋はなすじの正しい、色こそ

熱射に焼けているが、まぎれもない白人だ。

「驚いたろう。俺は、ここに二十年あまりもいる。万一有事のとき、ナイルの水源を閉へいそ塞くするためにかくれている。俺はドイツ人でバイエルタールという男だ」

こうして、想像を絶する悪魔ムラムブウエジの尿溜の怪奇のなかへと、運命の手が四人のものを招きよせてゆくのだった。

「猿酒郷」の一夜シユシャア・タール

一行の導かれた盆地は谿谷の底といった感じで、赭あかい砂岩の絶壁をジグザグにきざみ、
 遙か下まで石階いしばしが続いている。それが、盆地の四方に一か所ずつあって、それ以外の場所
 は野猿にも登れそうもない。しかし、五人のものは、なんの危害もうけなかった。かえ
 って、怪人バイエルタールは上々のご機嫌だった。

「はいで、白人諸君に会おうとはまったく夢のようだ。どうだ、
 Shushah 《シユシャア

『“という珍しいものを飲らんかね”』

といって、怪人は椰子やしの殻にどろりとしたものを注いで、

「ねえ君らも、子供の時に猿酒の話を聴いたろう。それが、ここへきてみると、立派に

『アクワ・シミエ猿酒』

といえるものがあるんだよ。これは黒猩猩がこつそり作っている。野葡萄ぶどう

や、無花果いちじくの類を樹洞ほらで醗酵はくこうさせ、それを飲むもんだからああいう浮かれ野郎になっちま

うんだ、はっはっはっはっは、それでここを『シユシヤア・タール猿酒郷』と名付けることにしたんだがね」

そういつて尻ごみをする一同にはカツサバ澱粉のパンをすすめ、じぶんは「シユシヤア猿酒」を呷あおり『ダグガ《ダッガ》』という、インド大麻に似た麻酔性の葉を煙草代りに喫あやっている。

その両方の酔いがもう大分まわつたらしく、バイエルタールはだんだん慄あやしくなってきた。半白の髪の様子ではもう五十にちかいだろう。ただ剛氣うつとそうな目が、恍うつつりとした快酔中にもぎらついている。

やがて、問われるままに、ここへ来た話をしはじめた。

「俺はもと、ドイツ領東アフリカ駐屯軍の一曹長だったが、一九一六年の三月にタンガンイカ湖で敗れた。そのとき俺たちの隊が退路にまよい、北へ北へといってヴィクトア・ニ

ールにでた。それはもう話にならぬような悲惨な旅で、一人減り、二人減りで百人もいた隊が、しまいには六、七人になってしまった。みんな熱病にかかったり、毒蛇にやられてしまった。

それで、とうとうここまで逃げのびると、さすがにイギリス軍もやってこなくなった。きつと、悪魔の尿溜ちかくで斃^やられちまったと、奴らは考えたにちがいない。しかし俺たちは生きのびていた。まるで、ロビンソン・クルーソーのような生活をして、大戦がいつ終ったかも知らないし、おまけに子まで出来た。はッはッはッは、むろんお袋は土人の女だがね」

こう言つてバイエルタールは、妙にぎらぎらする瞳でマヌエラを見据^すえた。魔烟^{まえん}のために、大分呂律^{ろれつ}が怪しくなっているし、調子も、うきうきと薄気味悪いほどである。

「ところで、つい一昨年のこと、ここへマコンデから宣教師がふらふらと迷い込んできた。みるとドイツ人なんだ。話がはずんだ。大戦が終つたということもそのとき聴いたし、故^こ国^{くに}も變つてしまつてナチスという、反共の天下になった事も初めて知った。だが、外地へゆく宣教師には特別の使命がある。スパイもやれば宣伝もやる。彼はそういう種類の男だったのだ。それで、ともかく部落は全滅したということにして、あることないこと大嘘を

こき混ぜて、マコンデの部落へいい触れさした。つまり、ここが行ってほならない危険な場所になったということを、帰りしなに触れさしたわけだよ。しかし、俺とその男のあいだには、かたい約束ができていた。いいか、俺はどんな蛮地にしようとも、立派なドイツ国民として行動して見せるのだ」

この今様ロビンソン・クルーソーがなにを言いだすのだろうと、一同は興味深く顔をのぞき込んだが、斉しくのつびきならぬ危険が起りそうな予感を覚えた。バイエルタールは、そしらぬ顔つきでお喋りを続ける。

「それはね、万一事ある場合、たとえば英仏相手の戦いがおこった場合、まず青と黒ニールの水源をエチオピアでとめてしまふ。それから、俺は白ニールにでて上流を閉塞する。と、どうなる。エジプトの心臓ナイル河の水が、底をみせて涸々^{からから}に乾あがるだろう。むろん灌漑水^{かんがいすい}が不足して飢饉^{ききん}がおこる。舟行が駄目になるから交通は杜絶する。そうなつて、澎湃^{ほうはい}とおこつてくる反乱の勢いを、ミスルの財閥や英軍がどうふせぐだろうか」

折から天空低く爆音が聞えた。毎夕、悪魔^{ムラムブウエジ}の尿溜^{うりずみ}からくる昆虫群をふせぐために、石^{ストーン}、その他の粉霧を上空から撒くのだという。それがマコンデからみえる「鳴る霧」の正体だったのだ。ドドが飛行機をみても驚かぬわけは、おそらくこの近くにいたため

に、機影を知っていたせいであろうと察せられた。

それから、その飛行機のことをバイエルタールに訊ねると……英領ケニアの守備隊で同僚を殺し、偵察機一台をさらってここへ逃げこんできた英人飛行士で、その後、縦断鉄道測量隊をヤンブレで襲い、当分防虫剤やガソリンには不自由しないと、バイエルタールは鼻高々の説明だった。

その間も彼の目は、寝ているドドの背に置かれたマヌエラの手のうえを、まるで甜め廻すように這いずっているのだが、どうやらそれも、ただの酔いのせいではなさそうに思われてきた。と突然、彼は割れるような哄笑を^{こやしやう}はじめた。

「分つたろう、俺はナイルの閉塞者なんだ。はっはっはっはっは、君らは妙な顔をして、俺を島流しの狂人とでも思ってるだろうが、それもよからう。しかし、ここには武器もあり爆薬もある！ それに、月に一度は連絡機がくる。サヴォイア・マルケッティの大輸送機が、^{ノルド・アフリカ・アヴィアチオーネ}北アフリカ航空の線から飛んでくる。倉庫もある、飛行場もあれば格納庫もある。全部、巧妙な迷彩で上空からわからんようになってる」

探検の一同は、聴いているまにだんだんと蒼ざめてきた。^{あお}今宵にも、命がなくなるかもしれぬおそろしい危機が、いま次第に切迫しつつあるのを知ったのである。おそろく、こ

れまでの探検隊に生還者がなかったのも、ここでバイエルタールに殺されたからにちがいない。かほどの、国の興廃にもかかわる大機密を明して、無事に帰すはずはない。カークをはじめ一人も声がなく、喪^{ほう}けて死人のようになってしまった。

ところが、座間一人だけはさすが精神医だけに、ほかの人たちとは観察がちがつていた。バイエルタールの言葉を聞いていると、ときどき他のことを急にいいだすような、意想^ほ逸^{んいつ}とみられるところが少なくない。これは精神病者特有の一徴候なのだ。

普通の人間でもこんな隔絶境に半月もいたら少々の嘘にも判別^{みわけ}がつかなくなるだろう。

それが、バイエルタールのは二十と数年——宣教師のでたらめをまことと信ずるのも無理はない。そのうえ、彼はインド大麻で頭脳を痺^{しび}らせているのだ。

けれど今となつては、それがじぶんたちには狂^{きちがい}人の刃物も同様。もう、どうあがこうにも……、彼の狂気の犠牲となるより他はなさそうに思われる。

防虫組織や飛行機などは、いかにも神秘境と背中合せの近代文明という感じだが、ナイルの閉塞、イタリア機の連絡とは、じつに華やかながら実体のない、狂人バイエルタールの極光^{オーロラ}のような幻想だ。いやいま、この猿^{シユン}酒^{シャ}宮^{ア・}殿^{パラスト}に倨^{きよ}然^{ぜん}という彼は、そのじつ、悪魔のような牧師の舌上におどらされている、あわれなお人よしの痴愚者なんだと、座間

だけはそう信じていたのである。

やがてドドをまじえた一行五人は小屋に押しこめられた。もっとも、番人もつけられず鍵もおろされない。武器も弾薬も依然として手にある。これはバイエルタールの手ばかりというわけではなく、四か所の石階いしばしに嚴重な守りがあるからだ。

アフリカ奥地の夜、山地の冷気が絶望とともに濃くなつてゆく。墓がまと蟋蟀こおろぎが鳴くもの憂いなかで、ときどき鬣狗ハイエナがとおい森で吠ほえている。その、森閑の夜がこの世の最後かと思うと、誰一人口をきくものもない。ときどき君が言いだしたばかりにこんな目に逢つたのだと、ヤンが座間を恨めしげに見るだけであつた。

と時が経つて暁がたがちかいころ、座間にとつては思いがけぬ事件が降つて湧わいた。一見大して奇もないようだったが、重大な意味があつた。それはとつぜん、マヌエラが氣懶けだるそうな声で、なにやら独り言ひとごとのようなものをドイツ語で言いはじめたのであつた。

「明日、牝めすをのぞいた残りを全部殺やるといふんだ。人道的な方法というからには、アカスガの毒を使うだろう」

驚いたことに、男のような言葉だ。調子も、抑揚がなく朗読のようである。そして、これがなかでもいちばん奇怪なことだが、いまマヌエラが喋しゃべっているドイツ語を、当の本人

が少しも知らないのである。知らない外国語を流暢に喋る——そんなことがと、一時は耳を疑いながらまえへ廻つて、座間はマヌエラをじつと見つめはじめた。

「マヌエラ、どうしたんだ、確かにおし！」

しかしマヌエラの目は、狂わしげなものを映してぎよろりと据つている。ひよつとすると心痛のあまり気が可怪おかしくなったのかもしれない。その間も、なおも讕言うわごとは続いてゆく。

「逃げやしないかな」

「大丈夫、武器は取りあげてないから、まさかと思つているだろう。第一、石階いしばしには番人があるし……そこを逃げて、マコンデ方面は網目のようだからな」

こうした気味の悪い独語が杜絶えると、闇の鬼気が、死の刻がせまるなかでマヌエラだけをつつんでしまう。彼女は、ちよつと間を置くとまたはじめた。

「水牛小屋の地下道は分りっこねえんだ。何時だ？ 三時だとすりや、あと二時間だが」

一体マヌエラは誰の言葉を真似ているのだろうか？ 座間は微動だもせず冷静な目で、じつとマヌエラをながめていたが、思わず……この時首をふった。すると、おなじようにマヌエラも首を振る。ハツとした座間が今度は試みに唇をとがらした。とまた、マヌエラが

おなじ動作を繰り返す。とたんに、座間はわつとマヌエラを抱きしめた。やがて、むせび泣きとともに二人の頬の合せ目を、涙が小滝のようにながれてゆくのだった。

「ああ君」

カークはじぶんとともに冷静だった座間が、近づく死の刻に取乱してしまったのだと思つた。しかし座間はすこしも腕をゆるめずに、まるで恋情のありったけを吐きだしてしまふように、泣いたり笑ったりもう手のつけようもない狂乱振りだった。が、座間は狂つたのではなかつた。彼は、悦びと悲しみの大渦巻きのなかで、こんなことを絶れ絶れに叫んでいた。

（『Latah』《ラター》は、マヌエラにはマレー女の血がある『Latah』《ラター》は、マレー女特有の遺伝病、発作的神経病だ。ああ、いますべてが分つたぞ。あの夜の、ヤンとのあの狂態の因も……、いま、マヌエラの発作が偶然われわれを救ってくれることも……）

『Latah』《ラター》は、さいしよ軽微な発作が生理的異状期におこる。そのときは、じぶんがなにをしているかが明白と分つていながら、どうにも目のまえの人間の言葉を真似たくなり、またその人の動作をそのまま繰り返す——つまり、反響言語、エヒョーラリ返響エヒョーキネ運動ジというのがおこる。してみると、いつかのあの夜も、と——座間には次々へと浮ん

でくるのだ。

あのとき……、ヤンが、あたしを愛してくれますか——と小声で言うのと、ちょうど、それそつくりの言葉をマヌエラが繰り返しかえた。また、抱こうと腕をかけると彼女もおなじ動作をした。それから淑女らしくもない醜猥なひとり言も、思えば醜言症^{コブローリ}という症状の一つなのだ。ああ、マヌエラにはマレーの血があるのだ。おそらく、マレー人系統のマダガスカル人の血が、何代かまえに混入したのであろう。そしていま、それがいく代か経ってマヌエラにあらわれたのだ。

血の禍^{わざわ}い、やはりマヌエラも純粹の白人ではない。しかし、いま一人もものを言わないこの小屋のなかで、どうして知りもせぬドイツ語で喋ったのだらう。それが、反響^{エヒョーラリー}言語のじつに奇怪なところである。遠くて、普通の耳には聴えぬような音も、異常に鋭くなった発作時の、聴覚には響いてくるのである。

今しも、バイエルタールの部下二人が靴^{くつ}音^{おと}立てて、小屋のまえを通り過ぎていったところを見ると、マヌエラは、彼らの会話を口真似したに違いない。それでは水牛小屋の地下道というのこそ、唯一のまぎれのない逃げ道だ。

こうして、マヌエラをめぐるあらゆる疑惑が解けた。まるでハイド氏のような二重人格

も、怪奇をおもわせたドドの魅魘みもうも、さらに、いま五人のものが浮びあがろうとすること
も、畢ひつきよう竟 マヌエラに可憐な狂気があるからだつた。座間は、息をふきかえした愛情の
はげしさに泣きながら、もう一刻も猶ゆうよ予できないことに気がついた。

「諸君、助かるかもしれん。とにかくすぐに水牛小屋へゆこう」

まず、醜言症を聴かせぬためマヌエラには猿さるぐつわ轡わをし、ドドを連れて、そつと一同が
小屋を忍びでたのである。そこには、地下からうねうねと上へのびて東方の絶壁上へでる、
やつと這つてゆけるほどの地下道があつた。一同はこうして、猿シユシヤア・タール酒 郷を命からがら
抜けてたのである。

やがて樹海の線に暁がはじまったころ、おそらく追手のかかるマコンデとは反対に、い
よいよ、悪魔の尿溜ムラムブウエジへと近付く密林のなかへ、心ならずも逃げこんで行くのだった。

雪崩なだれる大地

密林はいよいよふかく暗くなつて行つた。大懶獸メガテリウム・グラス草の犢こうしほどの葉や、スパイクの
ような棘とげをつけた大蔦つた葛かずらの密生うっそうが、鬱蒼と天日をへだてる樹葉の辺りまで伸びてい

る。また、その葉陰はかげに倨然きよぜんとわだかまっている、大蝟だごのような巨木の根。そのうえ、無数に垂れさがっている気根寄生木は、柵のようにからまり、瘤こぶのように結ばれて、まさに自然界の驚異ともいう大障壁をなしているのだった。しかも、下はどろどろの沢地、脛すねまでもぐるなには 角 毒 蛇ホーンド・ヴァイパー がいる。

蜈蚣むかでの、腕ほどもあるのがバサリと落ちて来たり、絶えず傘かさにあたる雨のような音をたてて山蛭ひるが血を吸おうと襲ってくる。まったくバイエルタールの魔手をのがれたのは一時だけのことで、またあらたな絶望が一同を苦しめはじめた。

「殺してよ、座間」

マヌエラが、しまいにはそんなことを言いだした。そして、虚ろな、笑いをげらげらとやってみたり、ときどき嫌いなヤンヘにツと流眊ながしめを送ったりする。彼女もだんだん、正気を失いはじめてきたのだ。

さすがにカークだけは、絶えず斧おのをふるって道をひらいてゆく。しかし、蛮煙瘴雨ばんえんしょううに馴れたこの自然児も、わずか十ヤードほどゆくのに二、三時間も死闘を続けるのでは、もうへとへとに疲れてしまった。一本の、馬蔓の根がとおい四、五町先にあつて、切るとずうんずうんと密林がうめきだし、しばらくカサコソと何者かが追ってくるような無気味

な音をたてている。カークも全精力がつき、ぐたりと樹にもたれた。

「どうする？　なにか、こうしたらというような見込みでもあるかね」

「どうするって　一体どうなりやいいんだ」ヤンが、ぎよろつと血ばしった目でふり向いた。

「われわれは、いつそバイエルタールに殺されちまよかったんだ」

とおく、一つ、鉛筆のような陽の縞しまが落ちている。そのほかは、闇にちかいこの密林のなかは、沢地の蒸気をうずめる塵じん雲うんのような昆虫だ。それを、蚊帳かやヴェールで避ければ布目にたかってくる。もう、悪魔ムラムブウエジの尿溜うりずみへはいくばくもないのだろう。

ところが、そういう筆舌につくせぬ難行のなかで、一人ドドだけは非常に元気だった。

マヌエラを背負い、ときどき樹にのぼっては木の実をとってくる。いま密林に抱かれ大自
然に囁かれ、野性が沸然ふっぜんと蘇よみがえつて来たのである。それをヤンが見て嘲あざけるようにいった。

「こいつのためだ。こいつを、わざわざ故郷へ送りとどけるために、四人の人間がくたばろうとするんだ。おい獣、貴様、マヌエラさんというお嫁さんがいて嬉うれしいだろうぜ」

こうしてどこという当てもなく彷徨さまよい続けるうちに、やがて日も暮れて第一夜を迎えた。カークは、危険な地上を避けて手頃な樹を選ぼうと思い、ひよいと頭上をみると、枝を結ゆ

いつけたのが目に入った。ゴリラの巢だ。しかしゴリラは、一日いるだけでまたほかへ巢を作る習性がある。してみるとこのうえもない宿である。

第二日――。

一行全部ひどい下痢と不眠のなかで明けていった。湿林の瘴氣しょうきがコレラのような症状を起させ、一夜の衰弱で目はくぼみ、四人はひよろひよると抜け殻のように歩いてゆく。

全身泥まみれで髭ひげはのび、マヌエラまで噎むつとなるような異臭がする。そしてこの辺から、巨樹は死に絶え、寄生木やどりぎだけの世界になつてきた。これが、パナマ、スマトラと中央アフリカにしかない、ジャングルの大奇景なのである。

つまり、寄生木や無花果属いちじくの匍匐性ほふくのものが、巨樹にまつわりついて枯らしてしまうのだ。そのあとは、みかけは天を摩ます巨木でありながら、まるで綿でもつめた蛇籠じやかごのように軽く、押せば他愛もなくぐらぐらと揺れるのである。森が揺れる。一本のうごきが薦つ蔓たかずらにつたわって、やがて数百の幹がざわめくところは、くらい海底の真昆布の林のようである。四人とも、それには幻を見るような気持だった。

ちようど正午ごろに、大きな野象らしい足跡にぶつかつた。つぶれた棘きよくけい茎けいや葉が泥水に腐り、その池のような溜りが珈琲色コーヒーをしている。しかし、そこから先は倒木もあつ

て、わずかながら道がひらけた。しかしそれは、ただ真西へと悪魔の尿溜のほうへ……まさに地獄への一本道である。

疲労と絶望とで、男たちはだんだん野獣のようになってきた。ヤンがマヌエラ共有を主張してカークに殴なぐられた。しかしカークでさえ、妙にせまった呼吸いきをし、血ばしった眼でマヌエラをみる、顔は醜い限りだった。

第三日――。

ヤンが、その日から肺炎のような症状になった。漂ひようこう 徨と泥と瘴しょうき気とおそろしい疲労が、まずこの男のうえに死の手をのべてきたのだ。ひどい熱に浮かされながら、幹にすがり、座間の肩をかりて蹠そつろつとゆくうちに、あたりの風物がまた一変してしまった。

大きな哺乳類はまったく姿を消し、体重はあつても動きのしづかな、王蛇ボアや角喇蜴イグアナなどの爬虫はちゅう虫だけの世界になってきた。植物も樹相が全然ちがって、てんで見たこともない根を逆だてたような、気根が下へ垂れるのではなくて垂直に上へむかう、奇妙な巨木が多くなった。それに、絶えず微震でもあるのか足もとの地がゆれている。

してみると、土の性質が軟弱になったのか、それとも、地すべ亡りの危険でもあるのだろうか？ この辺をさかいに巨獣が消えたのと思い合わせて、これがたんなる杞憂きゆうではなさそ

うに考えられて来た。いまにも足もとの土がざあつと崩れるのではないか——踏む一足一足にも力を抜くようになる。しかしここで、悪魔の尿溜ムラムブウエジの片影をとらえたようでも、森はいよいよ暗く涯はてもなく深いのだ。

すると熱の高下の谷のようなところで、ヤンがマヌエラをそつと葉陰に連れこんだ。

「あなたは、モザンビイクに帰りたいとは思いませんか」

突然のことに、マヌエラはきよとんと目をみはった。蚊帳ヴェールを透いて、なんでもの期になつて思ひださせようとするのかと、涙さえ恨めしげにひかっている。

「どうしました？　なぜ、黙っているんです」

「疲れたんですわ。あたし、なにか言おうにも、言い表せないんです」

「いや、モザンビイクへ帰れる確実な方法が唯一つあるんです。それは、バイエルタールのところへまた引返すことだ。ねえ、あの男は白人の女を欲している」

そういつて、ヤンは蜥蜴とかげのような目をよせてくる。足がふらついて、病苦に瘦やせさらばえた顔は生きながらの骸骨だ。マヌエラはぞつと気味わるくなってきた。おまけに、座間とカークは泥亀を獲りにいつていない。

「僕とあなたがゆきア、バイエルタールがなんで殺しましょう。そうして観念してあすこ

にいるうちにや、いつか抜けだす機会がきつとくると思うんです。ねえ、あなたの分別一つでモザンビイクへ帰れる。それとも、奴らに義理をたてて、ここで野垂死のたれじにしますかね」

「でもあたし、あなたのいう意味がすこしも分りませんけど」

「それがいかん。あいつら二人は、僕が今夜のうちにきつと片付けてみせます。熱がさがったとき、不寝番になるはずですからね」

と言いながら、ヤンはじりじりマヌエラにせまってくる。しかしそれは、どうせ死ぬものなら行きがけの駄賃と、まるで泥で煮つめたような絶望の底の、不逞不逞ふてぶてしさとかマヌエラには思われなかった。熱くさい呼吸、それを避けようともがけばぐらぐらつと地がゆれる。とその瞬間……、意外にもヤンがわつと悲鳴うなをあげたのである。

ドドだ。犬歯を牙のようにむきだして、もの凄い唸りうな声うなをたて、唇はヤンを噛かんだ血でまっ赤に染っている。憤怒のために、ドドは野性に立ち帰ったのである。切羽せっぱつまったヤンが拳銃ピストルをだそうとすると、その手にまたパツと跳とびついた。それなり二人は、ひっ組んだまま地上を転がりはじめたのだ。

大柄な獣さえこない禁断の地響きに、とつぜん、足もとがごとく地鳴りを始めた。

と見る……ああ、なんという大凄観！ とつぜん、目前一帯の地がずずつと陥おちはじめ

たのである。マヌエラは足もとを掬すくわれてずでんと倒れたが、夢中で蔦つたにすがりつきほと上をみると、今しも森が沈んでゆくのだ。梢こすえが、一分一寸とじりじりと下るあいだから、まるで夢のなかのような褪あせた鈍にぶい外光が、ながい縞目しまめをなしてきつと差しこんできたのである。森がしずむ！ マヌエラは二人の格闘もわすれ、呆然とながめていた。

大地の亀裂が蜈蚣むかでのような罅ひびからだんだんに拡がるあいだから、吹きだした地下水がざあつと傾かしいだ方へながれてゆく。しかし、そうして崩くずれてゆく地層のうえにある樹々は、どうしたことが直立したままである。攀縁性つるの蔓植物の緊密なしぼりで、おそらく倒れずにそのまますべにるのだろう——と考えたが、それも瞬時に裏切られた。

水の噴出がみるみる土をあらって幹根があらわれる。やがて、数尺下の支根が露むきでても……、まるで根ごと地上に浮きでて昇ってゆくような、奇怪な錯覚さえ感じてくるのだ。なんという樹か。その地底までも届くようなおそろしい根を、マヌエラは怪物のようにながめていた。この時耳もとで座間の声がした。

「おう、深井プティ・ラディックスの根！」

それが、旧根樹ニティルダ・アンティクスという絶滅種ではないのか。根を二十身長も地下に張るといふこのアフリカ種は、とうに黒奴時代こくどの初期に滅びつつあったはずである。

と、見る見る視野がひらけた。

思いがけぬ崩壊が風をおこして、地上の濛氣もうきが裂けたのである。とたんに、三人がはつと息を窒つめた。それまで、濛氣に遮さへぎられてずっと続いていると思われた密林が、ここで陥没地に切り折れている。

ムラムブウエジ
悪魔の尿溜——。

と三人は眩くような亢奮に我を忘れた。陥没と、大湿林の天険がいかなる探検隊もよせつけぬといわれる、この大秘境の墻かきの端まできたのだ。と思うと、眼下にひろがる大摺クレ鉢地タのなかを、なにか見えはせぬかと瞳を凝らしはじめる。

しかしそこは依然として、濛氣と昆虫霧が渦まき灰色の海で、絶壁の数かぎりない罅ひびも途中で消えてしまい、いったいどこが果でどこが底か——この大秘境を測ることさえ許されない。ただ枯れた幹をおとした旧根ニティルダ・アンティクス樹ツの、錯綜さくそうの根がゆらぐ間にみえるのだ。強韌きやうじんな、ピラミッド型の根が幹を支えているうちに、幹は枯れ、地上に落ちたその残骸は、まるで谿たにいっぱいにもつれた蜘蛛糸くもをみるようであった。やがてその枯色も、鎖ざしはじめた昆虫霧にうつすらと霞んでしまったのである。——大秘境「悪魔の尿溜ムラムブウエジ」はちらりと裾すそをみせ、それなり千古の神秘を人にみせることをしなかった。

三人はしばらく感慨ぶかげに立っていた。しかし気がつく、その格闘のまま、ヤンとドドの姿が消えてしまっているのだ。たぶん、ひっ組んだまま陥没地に落ちたのだらうと、マヌエラは気もそぞろであつたが、やがて紅い蔓花で花環を編んで、じぶんを救おうとして死んで故郷へもどつたドドのために、接吻とともに底しれぬ墓へ投げこんだ。

そうして、齒がぬけたような淋しさが来たが、また陥没がはじまりそうなので此処を引きあげねばならなかつた。しかし三人は、その日一日は酔つたような氣持でいた。前人未踏の、この東端まできて悪魔の尿溜をのぞいたのは、おそらく有史以来この三人だけかと思うと、自然の尊位と威力を踏みにじつた氣にもなるが、なによりここを出て人里に帰ることが、いまのところいちばんの問題になっている。

といつて、南へゆけばコンゴの「類人猿棲息地帯」ゴリラスツォーネ、そこではこの惨苦を繰り返さずにはすまない。してみると、北端にあたる大絶壁へ——いまアメリカ地学協会の探検があるはずだが……。

と、協議がまとまつて進むことになつたが……、これまでどおり、巨草荆棘けいぎよくを切りひらいてゆくではいく月かかるかも知れない。そのあいだ、この衰弱ではどうてい保つまいし、なによりこの二、三日来王蛇ボアに狙われどおしである。

「ずいぶん、考えりや保つもんですわね」

マヌエラが、ボロボロの斧をながめてふうつと吐息をし、なにやら、座間に言えというような目配せをした。すると、座間が胸の迫ったような声で、

「じつはカーク、いまマヌエラとも相談したことだがね。ここで、君一人に自由行動をとってもらいたいのだ」

「なぜだ」

とカークはびつくりして目をみはって、

「あんまり、唐突^{だしぬけ}な話で訳がわからんが」

「それは、こういう訳だ。君ならここを抜けだして人里へゆけるだろう。なまじ、僕ら二人という足手まといがあるばかりに、せっかく、ある命を君が失うことになる。お願いだ。明日、僕らにかまわずここを発^たつてくれないか」

「そうか」

としばらくカークは呆^{あき}れたように相手をみていたが、

「なるほど、君らを捨ててゆくのはいと容易^{やす}いが、しかし、ここに残ってどうするつもりだ」

「悪魔の尿溜へ、僕とマヌエラが踏みいるつもりなんだ」

「なに」

と、カークもさすがに驚いて、

「じゃ君らは、あの大陥没地^{クレイター}へ身を投げるつもりか……」

「そうだ、初志を貫く。だいたいこれが、僕の因循^{いんじゆんこそく}姑息^{こそく}からはじまったことだから、むろん、じぶんが蒔^まいた種はじぶんで蒔^かるつもりだよ。マヌエラも、僕と一緒にやることで死んでくれる。ただ、君だけは友情としても、どうにも僕らの巻添えにはしたくないんだ」

カークはマヌエラを振り向いた。彼女の目は断念^{あきら}めきつたあとの澄んだ恍惚^{たた}さを湛^たえて、にんまりと座間をみている。おそらく全人類中のたった二人として、悪魔^{ムラムブウエジ}の尿溜の底を踏んだときの二人の目はあの、ペンも想像も絶するおどろくべき怪奇と、また、恋の墓場としてのうつくしい夢をみるだろう。カークは、言葉を絶ってしばらく考えていた。

密林は、死んだような黄昏^{たそがれ}の闇のなかを、ときどき王蛇^{ボア}がとおるゴウツという響きがある。と、とつぜん、カークがポンと膝^{ひざ}をうって言った。

「座間、名案があるぞ。僕にそんな莫迦^{ばか}気^げたことを、いわないでもすむようになるぞ」

「えっ、なにがあるんだ？」

「それは、この蔦葛のうえを『Kintefwetefwe 《キンテフエテフエ》』に利用するんだ」

「……………」

「つまり、コンゴの土語でいう『自然草の橋』という意味だ。ああ、これまでなぜ気がつかなかったんだろう」

リビングストーンのマヌイエマ探検の部に、その『Kintefwetefwe 《キンテフエテフエ》』のことがくわしく記されてある。

——マヌイエマ近傍では、川を覆うて生草の橋ができる場合がある。つまり、兩岸からの蔓が緊密にからみ合つて、それがひろい川だと河床ちかくまで垂れてくる。踏むとふかふかとした蒲団ふとんのような感じで、足を雪から出すように抜きあげながら進む。

それがここでは、人間の身長の数倍以上のたかさで、蔦や大蔓が砦とりでのようにかためている。その自然の架橋を、いよいよ生気を復した三人がゆくことになり、やがて、マヌエラを押しあげてそのうえに立ったのである。この大湿林を、まさか上方からながめようとは思わなかったが、さすがその大眺望にはしばらく足を停めたほどだ。地平線は、樹海ではじ

まり樹海でおわっている。一色のふかい緑は空より濃く、まさに目のゆくかぎりを遮るものも、またこの単色をやぶる一物さえもないのだ。そうしてついに、この大湿林を抜けることができたのである。

楽々と、それまでできた十倍以上を踏破し、北側の傾斜からまわって、絶壁のうえへ出ることができた。

見おろすと、眼下の悪魔の尿溜はいちめんの灰色の海だ。その涯がうつくしい残陽に燃え、ルウエンゾリの、絶嶺が孤島のようにうかんでいる。しかし、瘡癤しょうれいの湿地からのがれてほつとしたかと思えば、ここは一草だにない焦熱の野である。

赤い、地獄のような土がぼろぼろに焼けて、たまに草地があると思えばおそろしい流沙であつた。そしてそこから、雨期には川になる砂サンド・リヴァ川が現われ、絶壁のちかくで地中に消えている。

「有難うカーク、どれほど君のために助かったことだろう」

「ほんとうですわ」

座間とマヌエラが真底から感謝した。それは、きて以来一滴も口にしない、おそろしい飢渴きかつから救われたからだ。カークが砂サンド・リヴァ川の下きかつの粘土層のうえが、地下流だというの

をやつと思ひだしたからである。ほかにも、ここへくると大枝をもつてきて、さきやかながら小屋も建てられた。そうして、熱射も避け、水も手に入れ、ときどき鳥をうつては腹をみたす。が、なにより困つたのは青果類の欠乏で、そろそろ壞血病の危険が氣遣きづかわれるようになってきた。

すると、ちようど六日目の午後に、一台の飛行機が上空に飛んできた。待ちに待ったアメリカ地学協会のものらしい。三人が飛びだして上着をふつていると、その飛行機からすうつと通信筒が落ちて来た。駆けよつて、ひらいてみると、明日午後に——と書いてある。ながい惨苦のちにやつとモザンビイクに帰れる。マヌエラは、感きわまつて子供のよう
に泣きはじめた。

しかしそのとき、その衝撃シヨックが因でまたラターがおこつた。今度は、カークのまえなので隠すこともできず、座間はその晩ねむれるどころではなかった。

（可哀そうな、かなしいマヌエラ。ここで、よしんば助かるにしろ、先々はどうなろう。治るまい、おそらく真の狂人きちがいに移つてゆくだろう）

暗中に、目を据えて焚火たきびを見つめながら、座間は痩せ細やるような思ひだつた。いまに、醜しゅうわい猥わいな言葉をわめき散らすようになれば、美しいマヌエラは死に、ただ見るものの好

色をそそるだけになる。よしんば助かっても空骸がのこる。恥と醜汚のなかでマヌエラの肉体が生きるだけ……。

するとその時、座間の目のまえへ幻となつて、一匹の野牛の顔があらわれた。

それは、コンデロガを発つて間もなく、曠原こうげんの灌木帯で野牛を狩つた時のこと、砂煙をたてて、牝の指揮者のもとに整然と行動する、その一群へ散弾をぶちこんだ。すると、腹をうたれたらしい一匹がもがいていると、他が危険をおかしてそれに躍りおどかかり、滅茶めっちゃに角で突いて殺してしまったのである。どうせ、駄目なものは苦しませぬようにと、野獣にも友愛の殺戮さつりくがある。医師にも、陰微な愛として安死術がある。

焚火のむこうで鬣狗ハイエナが喰わうようにうずくまつている。とたんに、怪しい幽霊がじぶんをみているような気がした。やがて、夢も幻もないまつ暗な眠りがはじまつたとき、座間は胸にかたい決意を秘めたのであつた。

翌朝、もう数時間後にはここを去ろうというとき、マヌエラは絶壁の縁にたっていた。悪魔の尿溜の大景観を紙にとどめようとして、彼女がしきりとスケッチをとっている。そこへ、座間が背後からしのび寄つてきた。陽炎かげろうが、まるで焰ほのおのようにマヌエラを包んでいる。頭が熱し、瞼まぶたが焼けて、じぶんは地獄に墜おちてもマヌエラを天に送ろうと、座間は

目を瞑り絶叫に似た叫びをあげていた。

しかも、マヌエラをみるとまた決意が鈍ってくる。大きな愛だと心をはげまし近寄ってゆくうちに知らず知らず、座間は砂川サンド・リヴァへはいってしまった。そこには殺すものが死に、殺されるものが生きる一つの偶然が潜んでいたのだ。彼は、水はなくとも砂が動くことは知らなかった。徐々に、彼のからだは前方にはこぼれてゆき、やがて、あつという間もなく地上から消えてしまったのである。

それなり、座間の姿はけつして現われてこなかった。ただわずかな間に消えてしまったことが、まるで秘境「悪魔の尿溜のろい」の呪のように、マヌエラさえ思うよりほかになかった。

遂に「悪魔の尿溜ムラムブウエジ」敗る

座間は死に、残る二人は助けられた。

マヌエラは、疲労と悲嘆のあぐく床についてしまったが、それから一月後に一通の手紙が舞いこんできた。上封は、ヌヤングウエ駐在英軍測量部とあり、ひらくとなかにはもう一通の封書がある。それは、泥によぐれ血にまみれてはいたが、目を疑うほどの驚きは、

愛^{いと}しいマヌエラへ、シチロウ、ザマより——とあるのだ。マヌエラは指先を震わせて封を切った。

マヌエラよ、天罰が私にくだった。あなたを、このうえ『Lalala』《ラター》で苦しませるのは忍びぬと思いそつとあの断崖からつき落そうとしたとき……私は、^{サンド・リヴァ}砂流に運ばれて地中に落ちこんだ。それは地中より湧^わきいで地中に消える暗黒河であった。

なん時間後か、なん日後か、とにかく私は闇のなかで目をさました。おそろしい冷気、冥路^{よみじ}というのはこれかなと思つたほどだ。そしてどこかに、滝があるような水流の轟^{とどろ}きがある。しかし、まだ私が死んでないということは、やがてからだを動かそうとしたときはつきりと分つた。節々が灼けるように疼^{うず}くのだ。私は、それでもやつと起きあがつた。手さぐりで、からだを探ってみると雑^{ざつ}囊^{のう}がある。なかには、ライターもあり固形アルコーもある。——ああ、この、短い鉛筆でくわしくは書けない。

そこで、服地をすこし破いて固形アルコーで燃すと、ぐるりがぼんやり分つてきた。何処^なかもが真白にみえる。目を疑つた。すると、天井から雪のようなものが落ちてきた。甜^なめて見ると唇につうんと辛味を感じた。それでやつと分つた。私は^{サンド・リヴァ}砂川から岩塩

の層に落ちこんだのだ。地下水が岩塩を溶かしてつくる塩の洞窟だ。マヌエラ、あなたには想像もできない。まるで月世界の山脈か砂丘のような起伏、石筍、天井からの無数の乳房、それが、光をうけるとパツと雪のようにかがやく。浄らかな……まったくこんな中で死ねれば有難いと思った。

畝もある。なかには氷罅もある。ときどき、雹のようなのがばらばらっと降ったり、

粉塩を小滝のように浴びることがある。と、ふとそばの壁をみたとき、思わず私ははっと呼吸をとめた。そこには巨きな粗毛だらけのまつ黒な手が、私を掴もうとするようにぬうつと突きでている。

マヌエラ、これが悪魔の尿溜の神秘「知られざる森の墓場」だ。

類人猿が、じぶんを埋葬にくる悲愁の終焉地だと思うと、私はその壁を無性にかき崩した。すると、その響きにつれてどつと雪崩れる。ああマヌエラ、塩を雪のようにかぶって起きあがったとき、一つ二つ、臨終そのままの姿であるいは立ち、あるいは蹲まり、あるいは腕を曲げ、ゴリラや黒猩猩が浮き彫りのように現われてくる。まったく絶えざる水蝕でかわるこの洞窟の中では、これが数百年あるいはなん千年まえのものか。ともかく、塩にうずまってすこしも腐らずに、今日まで原形を保ってきたのだ。ああ、私は悪魔の尿

溜に入りこんで、最奥の神秘をみた全人類中のたった一人の男だ。

そうして、間もなく死ぬだろうじぶんさえも忘れ、ただ人間が自然に対してした最大の反逆を、歓喜のなかで溶けるように味わっていたのだ。

それから、滝は地底へと落ちていく。それを知って、私は非常に落胆した。なぜなら、もしその地下水が絶壁へでていけば、そこから、悪魔の尿溜の大観を窺うことができるし、また位置が低ければあるいは出ることもできよう。しかし駄目だ。私は底から盛りあがってくる暗黒の咆哮ほうこうに、いよいよ出口がなく、いま岩塩の壁で密閉されていることを悟った。事実も、絶えず洞窟の形が水蝕で変っているらしい。

すると私は、ここの低温度がひじょうに気になってきた。獣類ならともかく人間は、うかうかすると凍死する危険がある。まったく、アフリカ奥地の夏に凍え死ぬなんて、ここが地下数十尺の場所とはいえ皮肉なもんだと思った。

すると、そこへ一つの考えがうかんできた。それはいうのもじつに厭なことだが、いま暖をとるものといえばそれ以外にはない。私は、類人猿の死骸に目をつけた。

それからのことは、婦人であるあなたには詳述を避ける。とにかく、ここへ死にに来て相当の期間生きていたものには、体内にほとんど脂肪の層がない。ともあれ……やつらを

燃やしてみることにした。

さいしよ、口腔くちに固形酒アルコール精をいれて、それに火をつけた。まもなく火が脳のほうへまわつて眼球が燃えだした。ごうつと、二つの窩あながオレンジ色の火を吹きはじめた。洞内が、なんともいえない美しさに染にじんでゆくのだ。裂け目や条痕の影が一時に浮きあがり、そこに氷河裂罅クレヴァスのような微妙な青い色がよどんでいる。淡紅色ときいろの胎内……、そこを這はいずる無数の青蚯蚓みみず。しかし、死骸は枯れきつていてなんの腥なまぐささもない。

私は、そうして暖まり、肉も喰った。しかし肉は、枯瘦こそうのせいかわ革を噛むように不味まずかった。マヌエラ、私がなにをしようと許してくれるだろうね。

ところが、三つほど燃やして四つ目をひきだそうとしたとき、ふいに天井が岩盤のように墜落した。雪崩れが、洞内の各所におこつて濛ぼうつと暗くなつた。それが薄らぐと崩壊場所の奥のほうがぼうつと明るんでいる——穴だ。それから、紆余曲折うよきよくせつをたどつて入口のへんにまで出た。そこには、最近のものらしい四、五匹が死んでいる。マヌエラ、私は洞をでてはじめて外の空気を吸った。いよいよ私は悪魔ムラムブウエジの尿溜うりずみのなかにでたのだ。

夜だった。空には、濛氣もつきの濃い層をとおして赭色あかにみえる月が、すばらしく、大きな暈かざをつけてどんよりとかかっている。私はいまだに、これほど超自然な不思議な光輝をみた

ことはない。中天にぼやつとした散光をにじませ、その光はあつても地上はまっ暗なのだ。すると、この森閑とした死の境域へ、どこか遠くでしている咆哮ほうこうが聴えてきた。それが、近くもならず遠くもならず、じつにもの悲しげにいつまでも続いている。と、それから間もなくのこと、ようやく、暁ちかい光がはじまるところ、ふいに私の目のまえにまっ黒なものが現われた。ぎよつとして、それを見つめながら、じりじりと後退あとじきつていった。

マヌエラ、なんだと思うね。カークほどの身の丈で、お父さんより肥つていて、片手を頭にのせてずしりずしりと歩いてくる。時には、両肢りようあしをかがめその長い手で、地上を掃はきながら疾風のようにはしる——ゴリラだ。私は、それと分るとぞつと寒気がし、顎あごががくがくとなり、膝がくずれそうになった。私は懸命に洞の中へ飛びこみ、最前の穴らしい窪みをみつけて隠れた。が、その洞穴ほらあなは、浅くゆき詰っている。なお悪いことに、そのゴリラが穴のまえで蹲うすくまつたのだ。やがて、夜が明けたとき、視線が打衝ぶつかった。私は、あの傀偉かいいな手の一撃でつぶされただろうか。

マヌエラ、私は暫しばらくしてから嗤わらいはじめたのだよ。じぶんながら、なんという迂闊うかつものだろうと思った。なんのために、そのゴリラが森の墓場へきたか忘れていたのだ。ゴリラ

はさいしょ、私をみたとき低く唸ったが、ただ見るだけで、なんの手だしもしない。

七尺あまり、頭はほとんど白髪でよほどの齢らしい。つまり、老衰で森の墓場へきたのだと、私はやつとそう思った。野獣がここへくるときは鬭争心は失せ、なにより彼らを狂暴にする恐怖心を感じぬらしい。そして食物もとらず餓えながら、静かに死の道にむかつてゆくのだ。マヌエラ、ここで私は冥路よみじの友を得たのだ。

Soko 《ソコ》——と、やがてそのゴリラをそつと呼んでみた。この『Soko 《ソコ》』、というのはコンゴの土語で、むしろ彼らにたいする愛称だ。それから、Wakhe 《ワケ》、Wakhe 《ワケ》——と、檻おりのゴリラへする呼声をいつても、その老獣はふり向きもしなかった。

ただ遠くで、家族らしい悲しげな咆哮が聴えると——ほとんどそれが、四昼夜もひっきりなく続いたのだが——そのときは惹ひかれたようにちよつと耳をたて、しかもそれも、ただ所作だけでなんの表情にもならない。そうして、私とゴリラと二人の生活が、十数日間 にわたつて無言のまま続いた。私は、同棲者になんの関心も示さない、こんな素つ気ない男をいまだにみたことはない。

さて、もう鉛筆もほとんど尽きようとしている。あとは、簡略にして終りまで書こうと

思う。

それから、私は精神医としていかにゴリラを観察したか、特にアツコルティ先生に伝えて欲しいと思う。それからも、毎日ゴリラはその場所を動かず、ただ懶^{だる}そうに私をみるだけだった。衰弱のために、もう動くのさえどうにもならぬらしい。私が脈を見てもぼんやりと委せているだけだ。しかし、これは森の墓場へきたという本能だけではなく、先天的にゴリラというやつは体質性の憂鬱^{メランコリア}症なのである。つまり、「沈鬱^{アプソルメ・テンデンス・デプレシ}になり易い異常的傾向^{ヨネン}」がある。ああ、また鉛筆の芯^{しん}が折れた。もう私は、これを書いてはいられない。

ここで早く、あなたへの愛とカークへの友情と、やがて私が死ぬだろうということを書かねばならない。私は、ながらく肉食ばかりしたため壊血病にかかった。いまは、齒齦^{はぐき}の出血が、日増しにひどくなつてゆく。そうだ！ 病の因となつた青果類はむろんのこと、この悪魔の尿溜^{ムラムブウエジ}には一点の緑すらもないのだ。昆虫霧で、日中さえ薄暮のように暗い。その下は、ただ鹹^{しお}沢^{わざわ}の結晶が瘡^{かさ}のようにみえるだけで、
ニティルダ・アンティクス
旧 根 樹 の枯根がぼうぼうと覆うている。

その根をゴリラのように伝わる事が出来ればいいが、人間で、おまけに今の私にはそんな体力はない。まったくのところ、どこかの一隅に有尾人がいるかもしれない。またど

ここに、象の腐屍がごろごろ転っていて、それを食う群虫がその昆虫霧かもしれない。しかし、この一局部にいてはなにも分らないのだ。ただ、ここが森の墓場であり、荒廃と天地万物が死を囁^{ささや}いてくる、場所であることだけは知っている。

私はきょうめずらしく鵜^{がらんちよう}※をつかまえた。よくあなたがドドを駟^{がらんちよう}らして、木のポストに入れさせていた封筒のことを思い出したのだ。私はそれで、この手紙を書いてその封筒にいれ、鵜^{がらんちよう}※に結びつけて放そうと思う。運よく……、そんな機会は万一にもあるまいが、もし、あなたの手に入ればそれは愛の力だ。

私は、この墓場に埋まる最初の人間として……悪魔の尿溜にいり込んだはじめての男として……また、ゴリラと親和した唯一の人として……ことに、あなたへの献身をいちばん誇りとする……。

いま、午後だが大雷雨になってきた。もう一日、この手紙を続けて、鵜^{がらんちよう}※を放すのを延ばそう。

マヌエラ、この一日延ばしたことがたいへんな禍^{わざわい}となった。といって、いま私が死のうとしているのではない。私が、いままで心を向けていたあらゆるものの価値が、まるで、どうしたことが感ぜられなくなってしまうのだ。あなたのことも、カークのことこの

ムラムブウエジ
悪魔の尿溜征服も、いつさい過去のものが塵ちりのように些細ささいにみえてきた。

どうしたことだろう。じぶんでそうであつてはならないと心を励まして、その力がまるで咒縛じゆばくされているように、すうつと抜けてしまうのだ。きつとマヌエラ、これは魂をムラムブウエジ
悪魔の尿溜に奪われたのだろう。人間という動物であるものが森の墓場へきて、恋人をおもつたり娑婆しゃばを恋しがつたりすることが、そもそも悪魔の尿溜の神さまにはお気に召さないのかもしれない。戒律たいりつだ。それを破つた私は当然罰せられる。それで今日から、「知らセブルクルム・ルクジ
れざる森の墓場」の掟おきてに従うことになった。いや、おそろしい力に従わせられたのだ。

今朝、ゴリラがちょうど二週間目に死んだ。

私は、鹹沢しおざわのへりにいて洞窟にいなかったが、そこへ妙な、聴きなれない音が絶きれ絶ぎれにひびいてくる。それが、洞窟のほうなのでさつそく戻ると、ゴリラがまさに死のうとする手でじぶんの胸をうち、かたわらの石をうっては異様な拍子を奏でているのだ。私もゴリラに音楽があるという噂は聴いていたけれど、その音は、「いま遠い、遠いところへゆく」と叫んでいるようなもの悲しげなものだった。私は、とたんに哀憐の情にたまらなくなつてきて、ゴリラの最期を見護みとろうと膝に抱えたとき、意外な、軽さにすうつと抱きあげてしまった。

まったく、力のあまりというのが、その時のことだろう。ながい、絶食と塩分の枯瘦^{こそう}とで、そのゴリラは骨と皮になっていた。それにしても、この私とてもおなじように瘦^やせ、まして、壊血病になやみながらこの老巨獣を、抱きあげられたことはなんといつても不思議であつた。私は、ここにいる間に森の人になったのではないか。痩せても二百ポンド以上のものを軽々とのせ、その両手をみたときは泥のような酔心地だった。

ゴリラを抱いた。と、すべて人間社会にあるものが微細にみえてきた。個人も功績も恋愛などというものも、すべて吹けば飛ぶ塵のようにしか考えられなくなった。マヌエラ、これが悪魔の尿溜の墓の掟なのだ。獣は野性をうしない、人は人性をわすれる——私も死にゆく巨獣となんのちがいがあろう。

こうして、私は、^{ムラムブウエジ}悪魔の尿溜を征服し、そうして征服されたのだ。だがマヌエラ、まだ私はさようならだけはいえるよ。

座間の手記は、ここで終っていた。^{ムラムブウエジ}悪魔の尿溜の妖氣^{ようき}に、森の掟に従わされ、よしんば生きていても遠い他界の人だ。不思議とマヌエラには一滴の涙もでなかった。

彼女はなかに、もう一通同封されている英軍測量部の手紙をとりあげた。

敬愛するお嬢さま——同封の書信を、お送りするについて、一奇譚きたんを申しあげねばなりません。それは、この発信地のヌヤングウエのポスト下には、同封の書信を握りしめた異様な骸骨が横たわっていたのです。それは、丈が四フィートばかりで、人間とも、類人猿ともつかぬ不思議なものでありました。当地は、おそろしい蟻の繁殖地で、朝の死体は夕には、肉はおろか骨の髄まで食われてしまうのです。ただ、その骸骨が不思議なものであっただけに、その旨を御興がてらに申し添えて置きます。

ドドだ！ マヌエラは、大声でさけんだ。

ドドは、ヤンと一緒に陥没地へ落ちたが、やはり生きていたのだ。そうして、座間が放った鵜がらんちよう※をとらえ、肢に結びつけてある封筒をみたとき、急にあの訓練を思いだしてヌヤングウエのポストへいったのだ。そしてそのあいだの、百マイルの道に精も根もつき、やっと辿たどりついて昏倒こんとうしたところを残忍な蟻どもに喰われたのだろう。

彼女は、草原の熱風に吹きさらされる骨を思い、座間の怪奇を絶した異常経験には、一滴も、流さなかった涙をすうと滴らした。

それから、ドドの血がついた封筒に唇をあて、人間よりも、高貴な純真なドドのために、心からの親しきでそつと十字を印したのである。

青空文庫情報

底本：「人外魔境」角川ホラー文庫、角川書店

1995（平成7）年1月10日初版発行

底本の親本：「人外魔境」角川文庫、角川書店

1978（昭和53）年6月10日発行

※副題は底本では、「有尾人《ホモ・コウダツス》」となっています。

入力：藤真新一

校正：鈴木厚司

2001年7月20日公開

2014年7月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人外魔境

有尾人

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 小栗虫太郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>